

「全国美術館会議 情報・資料研究部会 企画セミナーⅢ」
美術情報・資料の活用

— 展覧会カタログから
Web まで —

INFORMATION AND RESOURCES STUDY GROUP
OF THE JAPANESE COUNCIL OF ART MUSEUMS

ごあいさつ

全国美術館会議の情報・資料研究部会の企画セミナーも、本年度3回目を迎えました。

美術館情報をめぐる動きは、電子的リソースの構築や活用などが大変なスピードで進歩・変化をとげる一方、それ以外の美術館情報や資料の扱いに関しては、人的、経済的理由などで旧態依然とした活動に留まっている現状があります。

情報・資料研究部会では、日頃の活動を進める中で、個々の美術館の情報資料の整理や活用に関して、先端的な事例の紹介や提案などを行うことによって、展覧会カタログや、美術館の逐次刊行物などをふくむ美術館情報をより効果的に共有する道が開けるのではないかと考えてきました。それが、この企画セミナーを計画した発端でした。

当初から、セミナーでのフィードバックを反映し内容を充実させることをめざして、3年間は続けようということにしました。本年はその3年目になります。毎回限られた人数の参加者なので、広く私どもの趣旨が行き渡るということは望めませんが、参加者からは大変好評をいただいていることは、部会員にとっては嬉しいことです。

また、美術館の情報・資料の扱い―発行や整理、活用も含めて―は、ともすれば、美術館の展覧会などの主要な活動の影になりがちですが、これらについて考えることは、とりもおさず、美術館のあり方、活動姿勢を問うことでもあることを、改めて気づく機会となったことも、得難いことでした。

第1回は国立西洋美術館と東京国立博物館を会場に、第2回は愛知県美術館にもご共催いただき、愛知芸術文化センターを会場に開催いたしました。そして今回の第3回は、奈良国立博物館のご協力を得て開催いたします。同館は仏教美術資料研究センターが本年8月にリニューアルオープンしたばかりでもあり、同館の文化財アーカイブズの形成の長期に渡る蓄積と先端事例について知見を得るまたとない機会となることでしょう。

情報・資料研究部会の本セミナーが、いささかでも各美術館の活動のお役に立てば幸いです。

全国美術館会議
情報・資料研究部会長
山脇 佐江子
(姫路市立美術館長)

1. 名 称
- 全国美術館会議 情報・資料研究部会 企画セミナー III
2. 主 催
- 全国美術館会議 情報・資料研究部会／奈良国立博物館
3. 日 時
- 2011 年 12 月 16 日（金）－17 日（土）
4. 会 場
- 奈良国立博物館 講堂
5. テーマ
- 美術情報・資料の活用 ― 展覧会カタログから Web まで

第 1 日 2011 年 12 月 16 日（金）

12：30－		受 付	
13：00－13：05	（5 分）	挨 拶	湯山 賢一（奈良国立博物館 館長）
13：05－13：10	（5 分）	開会の挨拶	山脇 佐江子 （姫路市立美術館 館長 / 情報・資料研究部会 部会長）
13：10－13：30	（20 分）	総 論「美術情報・資料の活用 ― 提供と利用のはざまにおいて」	水谷 長志（東京国立近代美術館 情報資料室長）
13：30－14：10	（40 分）	第Ⅰ講「展覧会カタログ」	住広 昭子（東京国立博物館 学芸企画部 博物館情報課 情報資料室 専門職員）
	（15 分）	休 憩	
14：25－15：05	（40 分）	第Ⅱ講「美術館の逐次刊行物」	中村 節子（石橋財団ブリヂストン美術館 学芸員）
15：05－15：45	（40 分）	第Ⅲ講「今日の図書館から俯瞰する美術館の資料活動」	水谷 長志
	（15 分）	休 憩	
16：00－17：00	（60 分）	招待講座「文化財アーカイブズの形成にむけて ― 奈良国立博物館での取り組みから ―」	宮崎 幹子（奈良国立博物館 学芸部 資料室長） 嘉数 周子（奈良国立博物館 学芸部 資料室員）
	（15 分）	休 憩	
17：15－18：15	（60 分）	自己紹介＋質疑討論	
19：00－		懇 親 会	

6. 趣 旨
- 情報・資料研究部会は、美術館における情報・資料の活用について、2009 年度から毎年セミナーを開催してきました。2009 年度の第 1 回は、2 日間 6 講座によるセミナーを東京国立博物館・国立西洋美術館にて開催、2010 年度の第 2 回セミナーは愛知芸術文化センターにて開催し、受講者より好評をいただくことができました。本年度は関東・中部と実施してきた会場を関西の地に移し、連続セミナー企画の掉尾を飾る第 3 回セミナーを奈良国立博物館にて開催します。
- 本セミナーでは、変化のスピードが激しいライブラリーの現況を踏まえた上で、展覧会カタログ、美術館の逐次刊行物から始めて、近年 Web 上で構築・活用が進んでいる電子的リソースについても視野を広げ、書籍からデジタル情報までさまざまな美術情報・資料の効果的な整理・利用法を検討します。当研究部会が以前より取り組んできたテーマである作品情報の発信とアクセスについても最近の動向を紹介し、美術館の現場で広く関心を引き起こしていきたいと考えています。
- 今回の会場である奈良国立博物館仏教美術資料研究センターは本年 8 月にリニューアルオープンしたばかりで、例年の 6 講座に加え、同館の文化財アーカイブズ形成の先端事例について招待講座としてご紹介いただくことになりました。これらの講座により、情報という地平から美術館が社会とどう関わっていくかを考えるきっかけをご提供できれば幸いです。

第 2 日 2011 年 12 月 17 日（土）

09：15－		受 付	
09：30－10：10	（40 分）	第Ⅳ講「電子的リソース（二次資料）」	水谷 長志
10：10－10：50	（40 分）	第Ⅴ講「電子的リソース（一次資料）」	川口 雅子 （国立西洋美術館 主任研究員〔情報資料〕 / 情報・資料研究部会 幹事）
	（15 分）	休 憩	
11：05－12：15	（70 分）	第Ⅵ講「作品情報の発信とアクセス」	室屋 泰三（国立新美術館 主任研究員〔情報〕）
12：15－13：30	（75 分）	昼休み	
13：30－14：30	（60 分）	施設見学「仏教美術資料研究センター」	
	（ 5 分）	休 憩	
14：35－15：25	（50 分）	質疑討論	
15：25－15：30	（ 5 分）	閉会の挨拶	鴨木 年泰 （財団法人 東京富士美術館 学芸員 / 情報・資料研究部会 幹事）

ごあいさつ	山脇 佐江子	
総 論	美術情報・資料の活用 ― 提供と利用のはざまにおいて	5
	水谷 長志	
第 I 講	展覧会カタログ	6
	住広 昭子	
第 II 講	美術館の逐次刊行物	10
	中村 節子	
第 III 講	今日の図書館から俯瞰する美術館の資料活動	14
	水谷 長志	
第 IV 講	電子的リソース (二次資料)	18
	水谷 長志	
第 V 講	電子的リソース (一次資料)	22
	川口 雅子	
第 VI 講	作品情報の発信とアクセス	26
	室屋 泰三	
招待講座	文化財アーカイブズの形成にむけて ― 奈良国立博物館での取り組みから ―	32
	宮崎 幹子 嘉数 周子	

2011.12.16 (金) 13:10―13:30 於、奈良国立博物館 講堂

水谷 長志 (東京国立近代美術館)

1. はじめにー本セミナー「美術情報・資料の活用ー展覧会カタログから Web まで」の成立ちと目的

2. 美術館図書室 (Art Museum Library、以下 AML) の課題と責任

Museum as publisher ということ
「ミュージアムはきわめて旺盛な出版活動の主体である」

Museum publications について
「多様な出版物 活動の記録として永く残すべきもの vs 一時的なエフェメラ (ephemera)」

Museum publications へのアクセス可能性を考える
「灰色文献からの脱却」

eg. 展覧会カタログのアクセス可能性を考えてみる
↑

自館刊行物を共有財にするための課題と責任

ALC: Art Libraries' Consortium 美術図書館横断検索
『展覧会カタログ総覧』日外アソシエーツ 2009.3

3. 提供と利用のはざまにおいて

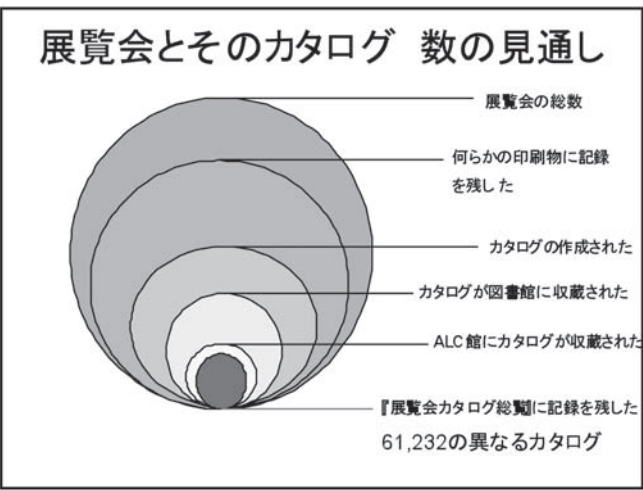
publisher (writer) であり user (reader) であること

ミュージアムの資料担当の課題と責任

publisher (writer) side として
accessibility
[自館刊行物の] 提供可能性の範囲を自覚する

user (reader) side として
availability
[必要とする資料の] 利用可能性の回路を保証する

相互協力網の必要と設置義務／可能性の根拠



4. AML を担う人ーどこもさほどの大差なく、同じような事で頭を悩ましているということ

AML のための場として [も], 全国美術館会議 情報・資料研究部会があるということ

5. 各論の構成

情報・資料業務を語る二側面

ー資料論と組織化論
本セミナーの主力は前者の資料論
組織化論は第III講で「分類」と「目録」に限定して言及
さらに参加者の業務実態を踏まえ、
質疑の中から展開を期待！

第 I 講「展覧会カタログ」 資料論

第 II 講「美術の逐次刊行物」 資料論

第 III 講「今日の図書館から俯瞰する美術館の資料活動」 折衷論

第 IV 講「電子的リソース (二次資料)」折衷論

第 V 講「電子的リソース (一次資料)」資料論

第 VI 講「作品情報の発信とアクセス」システム化論

1. 展覧会カタログとは

1.1 展覧会カタログの定義

展覧会の目録

展覧会であることが判明

出品が同定できる資料

通常は会期中に販売・配布される

1.2 展覧会の種類

目的 販売・宣伝／発表・コンクール／公開・陳列

形式 個展／グループ展／美術団体展／コンクール展／常設展／企画展／巡回展／共催展

1.3 展覧会カタログの発展

戦前 1 枚物や小冊子の出品目録と大型の図録

戦後 小冊子から大型化／図版の割合の増加とカラー化／体裁の多様化

論文・参考文献・各種資料等の充実／

バイリンガル化（学術的カタログ）

出版部数の増加／制作・編集方法の変化／

刊行形態の変化（展覧会終了後の刊行）／媒体の変化

現在の展覧会カタログ 学術的なカタログの一般的構成
主催者あいさつ／概説／論文／作品図版／作品データ（名称、作者、時代・制作年、品質形状・素材、寸法、所蔵者、来歴、文献等）／作品解説／年表・年譜／参考文献／作家解説／用語解説／資料等

2. 展覧会カタログの取り扱い－資料的特性と管理

2.1 収集

2.1.1 美術の世界での灰色文献

・展覧会の会期中に会場で販売され（期間・場所が限定）、発行部数も少なく、図書としての一般の流通経路にのらないことから、入手が困難な資料とされる。（洋カタログとの違い）

・著作権法第 47 条（美術の著作物等の展示に伴う複製）上の小冊子？
レオナルド・フジタ展カタログ事件

2.1.2 収集方法

・入手のための情報収集は、インターネットの普及により容易に

・購入方法

ミュージアムショップ（他館のカタログを扱う店もあり）／共催新聞社／古書店／

web サイト

・寄贈・交換

網羅性・即時性・継続性・受入体制が課題

・JAC(Japan Art Catalog) プロジェクト

日本の展覧会カタログを、海外の日本美術研究の拠点機関に寄贈する事業

（財）国際文化交流推進協会アートカタログ・ライブラリー（1996 年 11 月－2004 年 10 月）

の資料は国立新美術館に引き継がれ、事業継続

・大学図書館等でも展覧会カタログを収集

芸大・筑波大・美術系大学等

東京大学駒場美術博物館資料室 2007 年開室

2.2 整理

2.2.1 資料区分と配列（物理管理）

資料区分（配置）

・一般図書との区別

美術館の図書室では展覧会カタログがコレクションの中核的位置を占めるため、展覧会カタログと一般図書を区別する傾向

・パンフレット状のカタログの扱い

展覧会カタログの中で図書的なカタログとパンフレット状のカタログを分けて扱う場合もある

配 列

・カタログという資料区分を設ける場合は独自の配列が可能

分類順配列 同じ分類が集中／複合主題のものも一か所にしか置けない

会場順配列 館コードの付与とその維持が必要

受入順配列 スペースの節約／検索手段が別に必要

2.2.2 書誌データ作成（情報管理）

書誌データの例

・国立国会図書館 集中方式

JAPAN MARC NDL OPAC（2002-）

・国立情報学研究所（NII） 共同分担目録方式

NACSIS-CAT NACSIS Webcat（1997-）

・東京都現代美術館 自館で作成

書誌作成のツール

・『日本目録規則 1987 年版 改訂 3 版』日本図書館協会目録委員会編 日本図書館協会，2006 （NCR）

・『英米目録規則（Anglo-American cataloguing rules, 略称 AACR2）第 2 版 日本語版』日本図書館協会，1995

NACSIS-CAT のデータ作成のためのルール

・目録システムコーディングマニュアル （CM）

<http://www.nii.ac.jp/CAT-ILL/MAN2/CM/mokuji.html>

展覧会カタログについてのマニュアル（2006 年 6 月より運用）

・「展覧会カタログに関する取扱い及び解説」

http://www.nii.ac.jp/CAT-ILL/manuals/exhb_toriatsukai.pdf

・「コーディングマニュアル（展覧会カタログに関する抜粋集）」（展 CM）

http://www.nii.ac.jp/CAT-ILL/manuals/exhb_cm.pdf

展覧会カタログの書誌作成におけるポイント（NACSIS-CAT 和書の例）

記 述

＜タイトル＞

・タイトルと責任表示の情報源
→標題紙（標題紙裏を含む）、奥付、背、表紙 （NCR）

・標題紙がない場合
→図書中にもっとも詳しい書誌情報が示されている情報源を標題紙に代わるものとみなす。（NCR）

・標題紙、奥付、背、表紙に表示されている各タイトルが異なる場合
→原則として標題紙を情報源とする。（展 CM）
→共通する書名があればその書名を、なければ標題紙、奥付、背、表紙の優先順位に従って本タイトルとして記録し、他のタイトルは注記事項とする。（NCR）

・「特別展」・「〇〇記念展」などの冠称の扱い
→タイトル関連情報（サブタイトル）とする。（展 CM）
→TR フィールド（タイトルと責任表示）に記録することができるのは、本タイトルと同一個所に表示されているタイトル関連情報のみ。それ以外の個所に表示されているタイトル関連情報は、VT フィールド（その他のタイトル）に記録する。（CM）

・年次・回次の扱い

→VOL フィールド（巻冊次等）（CM）

＜責任表示＞

・個人の著作か団体の著作かが不明
→人名の場合の肩書き・所属団体名等は責任表示から省略。（NCR）

・巡回展・共催展などで、責任表示が多数ある場合

→同一の役割の責任表示の数が 3 までのときは、そのま

ま記録、4 以上の場合には、一つだけを記録し、他は省略することができる。また、省略された責任表示は NOTE フィールドに記録する。（CM）

＜出版事項＞

・出版地・出版者が資料本体に表示されていない場合、開催地・会場名を出版地・出版者として補記する。（展 CM）

＜形態に関する事項＞

・ページ付のない場合、1 冊とする。大きさは cm 以下を切り上げる。変形本は縦×横（NCR）

＜注記＞

・会場・会期、主催者など展覧会カタログに固有の情報

→NOTE フィールドに記録する。（展 CM）

・「展覧会カタログ」ないし「展覧会カタログ（出品目録）」であることを注記。

・展覧会の出品作家（3 名程度）、企画・主催者（3 つまで）を記録。

・展覧会の会期・会場に関する情報を記録。巡回展の場合は 3 会場まで。会期・会場は、図書以外の情報から補うこともある。

アクセスポイント（標目）

＜著者標目＞

・下記についての AL フィールドを作成する。（展 CM）
1) 展覧会カタログの編著に関わった個人あるいは団体
2) 展覧会に出品した作品等の制作者である個人あるいは団体（出品作家）※作品図版が収録されている場合
3) 企画・主催等において展覧会の開催に関与した個人あるいは団体
4) 単館展の場合に会場となった美術館等団体

＜件名＞

・一般的な件名表 NDLSH（国立国会図書館件名表）と BSH（基本件名標目表 日本図書館協会）
・「展覧会カタログ」という件名を記録する。また、出品作家や、所蔵館名（単独館の所蔵品のみで構成される展覧会の場合）を件名とする。（展 CM）

＜分類＞

・一般的な分類法 NDC（日本十進分類法）
書架分類（書架に配列する際のカテゴリ）と書誌分類（書誌データ上の分類）の両方に使える。
・独自分類 採用する館もある。維持に労力がかかる。

2.3 保管・保存

・保管場所・方法に配慮必要

・廃棄の問題

・作成館での保存の責任 館の活動の記録



3. 展覧会カタログの利用

3.1 利用の目的

展覧会 (催事) 情報の情報源
展覧会出品歴の情報源
作品情報の情報源 (作品データ・画像・参考文献)
作家に関する情報源 (年表・年譜・著作物採録)
レファレンスサービスの情報源
最新の研究動向の入手

3.2 展覧会カタログの検索

目録 (刊行物)

- 『展覧会カタログ総覧』日外アソシエーツ株式会社編
日外アソシエーツ (紀伊国屋発売), 2009.1 2 冊
東京国立近代美術館・横浜美術館・国立西洋美術館・東京都
写真美術館・国立新美術館・東京国立博物館・東京都江戸東京
博物館の 7 館が収集した展覧会のカタログ 61,300 点を分類別
に配列し、開催年や会場会期、主催者および所蔵館を掲載。
巻末に人名・事項名索引と、主催者名索引を付す。
- 『東京都現代美術館所蔵展覧会カタログ目録 日本語
(本文編)・日本語 (索引編)』東京都現代美術館普及部図書
情報係 (美術図書室) 編 東京都現代美術館, 2000.3-2001.2 2 冊
- 『東京文化財研究所蔵書目録 6(上) 展覧会カタログ
目録編 : 1888-2004 年開催分)・6(下) 展覧会カタロ
グ 索引編』東京文化財研究所情報調整室資料閲覧室編 文化財
研究所東京文化財研究所, 2006.3 2 冊
- 『笹木繁男氏主宰現代美術資料センター寄贈資料目録』
東京文化財研究所, 2002.3 CD-ROM1 枚
- 『笹木繁男氏主宰現代美術資料センター寄贈資料目録
画廊関連データ』
[文化財研究所東京文化財研究所], 2006.3 CD-ROM1 枚
- 「特集 : 国立国会図書館所蔵戦前期美術展覧会関係資
料目録」石渡裕子『参考書誌研究』第 50 号 国立国会図書館専門
資料部, 1999.2

- ・ *The Worldwide bibliography of art exhibition
catalogues, 1963-1987.* vol.1-3. Millwood, Kraus
International, 1992 3v.

WEB－OPAC

- ・ NDL-OPAC (国立国会図書館) <http://opac.ndl.go.jp/>
- ・ NACSIS Webcat (国立情報学研究所) <http://webcat.nii.ac.jp/>
フリーワードに「展覧会カタログ」と入力して
検索すると 55,743 件ヒット (2011.11.1 確認)
2012 年度末に終了し、後継サービス CiNii
Books に移行の予定

・ 美術図書館横断検索 (ALC)	http://alc.opac.jp/ 下記の機関の展覧会カタログを含む蔵書を横断検索
・ 東京国立近代美術館アートライブラリ	平成 14 年 (2002) 年開室
・ 同工芸館図書閲覧室	平成 14 年 (2002) 年開室
・ 同フィルムセンター図書室	平成 7 年 (1995) 開室
・ 国立新美術館アートライブラリー	平成 19 年 (2007) 開室
・ 東京都現代美術館美術図書室	平成 7 年 (1995) 開室
	昭和 50 年 (1975) 開室の東京都美術館美術図 書室の蔵書を引き継ぐ
・ 横浜美術館美術情報センター	平成元年 (1989) 開館
・ 国立西洋美術館研究資料センター	平成 14 年 (2002) 開室
・ 東京都写真美術館図書室	平成 7 年 (1995) 開室
・ 東京国立博物館資料館	昭和 59 年 (1984) 開館
・ 江戸東京博物館図書室	平成 5 年 (1993) 開室
・ 神奈川県立近代美術館美術図書室	平成 15 年 (2003) 開室

- ・ 展覧会カタログ検索 (東京文化財研究所)
<http://archives.tobunken.go.jp/internet/cbkensaku.aspx>
30,906 件 (2011.3.25 更新)
会場名・展覧会名・開催年 (単年度のみ) から検索

複 製

- ・ 『近代日本アート・カタログ・コレクション』ゆまに書房, 2001-
明治初期～戦前の展覧会カタログの復刻
- ・ 近代デジタルライブラリー (国立国会図書館)
<http://kindai.ndl.go.jp/>
明治・大正期刊行図書の資料本文をデジタル
画像で閲覧できるサービス
国会図書館サーチ (開発版) <http://iss.ndl.go.jp/>
からも利用可能

海 外

- ・ WorldCat (OCLC Online Union Catalog)
<http://www.worldcat.org/>
OCLC((Online Computer Library Center) が
提供する世界最大の総合目録データベース
- ・ KVK - Karlsruher Virtueller Katalog
<http://www.ubka.uni-karlsruhe.de/kvk.html>
欧米の図書館の蔵書を横断検索するシステム
World cat も含む
- ・ Worldwide Books Exhibition Catalogues and Art Books
<http://www.worldwide-artbooks.com/>
1960 年代以降の展覧会カタログおよび 1992
年以降のアメリカの美術関係書の検索
- ・ Pre-1877 Art exhibition Catalogue Index
<http://americanart.si.edu/research/programs/1877/>
1773 年から 1876 年までの 1,057 の展覧会に
ついて、作家名や件名、カタログタイトルな
どから検索。約 14 万件のデータを収録

- ・ Artlibraries.net <http://artlibraries.net/>
欧米の博物館・美術館附属 30 図書館の蔵書メ
タ検索

3.3 展覧会の出品情報の検索

目録 (刊行物)

- ・ 『内国勸業博覧会美術品出品目録』
東京国立文化財研究所美術部編 東京国立文化財研究所, 1996
- ・ 『明治期万国博覧会美術品出品目録』
東京国立文化財研究所美術部編 東京国立文化財研究所, 1997
- ・ 『明治期美術展覧会出品目録』
東京国立文化財研究所美術部編 東京国立文化財研究所, 1994
- ・ 『明治期府県博覧会出品目録 明治 4 年～ 9 年』
東京文化財研究所美術部編 東京文化財研究所, 2004.3
- ・ 『大正期美術展覧会出品目録』
東京文化財研究所編 東京文化財研究所, 2002
- ・ 『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』
東京文化財研究所美術部編 東京文化財研究所, 2006
- ・ 『日展史』 1(第 1 回文展 : 明治 40 年)～41(改組第 10 回日展 :
昭和 53 年) 日展, 1980～2002 41 冊
- ・ 『日展史資料』日展史編纂委員会編 日展, 1990 2 冊
1 文展・帝展・新文展・日展全出品目録 明治 40 年 - 昭和 32 年
2 文展・帝展・新文展・日展全出品索引 明治 40 年 - 昭和 32 年
- ・ 『日本美術院百年 第 1 ～ 15 巻』
日本美術院編 日本美術院, 1989 ～ 1999 18 冊
- ・ 『日本美術院百年史索引』日本美術院編 日本美術院, 2004
- ・ 『美術家索引 (日本・東洋篇)』
恵光白編 日外アソシエーツ (紀伊国屋書店発売), 1991.12

3.4 展覧会情報の検索

3.4.1 開催中の展覧会

- ・ Museum-Café (廣斉堂) <http://www.museum-cafe.com/>
採録対象 全国 832 の美術館
展覧会は、地域、ジャンル、開催期間から検索 2001 以降対象
- ・ アートコモンズ (国立新美術館)
<http://ac.nact.jp/> (2007 年 3 月開設)
展覧会タイトル 50 音別、展覧会開催年別、会場 50 音別、会場
県別の表示とタイトル、概要、会場、主催者からの検索
- ・ インターネットミュージアム (丹青社)
<http://www.museum.or.jp/>
展覧会・イベント情報検索はキーワード、イベント分類、地域、
館種 (ジャンル)、期間から検索
- ・ Artscape (大日本印刷)
<http://artscape.jp/exhibition/index.html>
美術情報の web マガジン (毎月 1,15 日更新)
展覧会ピックアップ / 展覧会スケジュール等

3.4.2 過去の展覧会

- ・ 『日本美術年鑑』明治 43 年版 画報社 (1911) ～
美術研究所 (現在の東京文化財研究所) 刊行は、昭和 11 年版
(1936) より
年度ごとの美術界の主要な出来事とともに美術展覧会の情報を掲載
- ・ 『日本の美術展覧会開催実績 1945-2005』
中島理壽監修 国立新美術館, 2010.12
日本の美術館における美術展覧会の開催記録をまとめた報告書
既刊 3 冊分をまとめたもの。
- ・ 日本の美術展覧会記録 1945-2005 (国立新美術館)
<http://db.nact.jp/exhibitions1945-2005/>
上記報告書の web 版 2011.4.1 公開
美術館名、展覧会名で検索 開催年別、地域別、美術館 (30 音順)
からも選択可能
表示項目は、美術館名、展覧会名、会期、主催・協力、備考、
カタログ刊行の有無、所蔵 (ALC・NAL)
- ・ 近現代美術展覧会開催情報検索 (東京文化財研究所)
<http://archives.tobunken.go.jp/internet/exkensaku.aspx>
1935 年から 2010 年までに主に日本国内で開催された近現代
美術関係の展覧会開催情報 179,256 件 (2010.5.7 更新)
会場、展覧会名等、開催年から検索
- ・ 各美術館・博物館刊行物
『国立西洋美術館展覧会総覧』
国立西洋美術館編 国立西洋美術館, 2009
- ・ 各美術団体の団体史・機関誌、Web サイト
- ・ 雑誌記事

3.5 その他の情報を探す

展覧会カタログの中の論文

- ・ ALC 参加館 OPAC で検索
- ・ 美術関係文献検索 (東京文化財研究所)
<http://archives.tobunken.go.jp/internet/oakensaku.aspx>
展覧会カタログも採録の対象
古美術関係 1966 ～ 2006 年、
近現代美術関係 1935 ～ 2006 年 397,219 件 (2010.4.28 更新)
編著者・キーワード・雑誌名 (カatalog は書名) からの検索

展覧会カタログの中の美術家書誌

- ・ 『美術家書誌の書誌 : 雪舟から東芋、ヴァン・ エイク
からイ・ブルまで』中島理壽編 勉誠出版, 2007.12

4. その他

- ・ 他の展覧会関連資料
エフェメラ類・調査関連資料・広報資料などの扱い
→アーカイブ化の必要
- ・ 国会図書館や公立図書館等への寄贈
- ・ 展覧会出品作品情報の共有

1. 美術館と「逐次刊行物」

1.1 逐次刊行物とは何か

1) 継続的に分冊として刊行され、
あらかじめ完結の期限を定めていない

2) 各分冊には、刊行順序を示す巻号など
の表示がある

3) 同一のタイトル(標題)で、通常は同一の形態

4) 定期刊行物と不定期刊行物がある

1.2 逐次刊行物の種類

雑誌・紀要／新聞／年鑑／年報・館報／
研究報告・調査報告／ニュース・たより

※これまでは、冊子体や二つ折り等の形態の
印刷物が一般的だったが、電子的なものが
増えてきた

1.3 美術館は「逐次刊行物」とどのように関わっているか

1) 出版者としての美術館

2) 利用者としての美術館

2. 出版者としての美術館

美術館は／私たちは「何を」「誰に」伝えたいのか？

連続して刊行される以上は、一定の編集方針があるのか？

様々な事例を通して、美術館が刊行する逐次刊行物について考える

2.1. 美術館が刊行する逐次刊行物について

2.1.1 種類

年報・館報／紀要／ニュース・たより／
研究報告・調査報告

2.1.2 それぞれの逐次刊行物の動向と問題点

【年報・館報】

内 容

・設立趣旨／沿革

・事業

展覧会／教育普及・イベント／
保存・修復／作品貸出／館外事業／
ボランティア・友の会の活動／出版物

・利用統計

入場者数

・所蔵資料

新収蔵（作品・図書資料）／
所蔵資料の統計（作品・図書資料）

・関係法規

・組織・職員

・利用案内

・研究・調査報告〔紀要を刊行しない館〕

・個人の業績（調査研究）

構 成

→データ中心（表が多い）／記述中心／
データの中に記述が入っている

レイアウトやページ数

→予算が厳しいのか？省力化なのか？

タイトル表示

→タイトル変更なのか？
単なる表紙デザインの変更なのか？

展覧会の出品リストを掲載しない

→本当に展覧会カタログを見れば良いのか？

新収蔵作品の写真を掲載しない

→作品同定の困難さ

目次がない／ノンブル表示がない
〔論文を収載しているにもかかわらず〕

→単なるミスなのか？

頒布先

→国立国会図書館、大学図書館、美術館

【紀 要】

継続刊行の困難さ

→収載論文が1点だけ、1～2号で休刊、
合併号で刊行

頒布先

→国立国会図書館、大学図書館、美術館

【ニュース・たより】

位置付け・役割の変化

→広報媒体への移行、記事の収載、総目次

頒布先

→国立国会図書館、大学図書館、美術館

2.2 美術館は何故逐次刊行物を刊行するのか？

2.2.1 博物館法との関係

(博物館の事業)

第三条の六 博物館資料に関する案内書、解説書、
目録、図録、年報、調査研究の報告書
等を作成し、及び頒布すること。

(運営の状況に関する情報の提供)

第九条の二 博物館は、当該博物館の事業に関する
地域住民その他の関係者の理解を深め
るとともに、これらの者との連携及び
協力の推進に資するため、当該博物館
の運営の状況に関する情報を積極的に
提供するよう努めなければならない。

2.2.2 美術館の活動の成果をアピールする

匿名性（無署名記事）と個人名表示の問題

2.2.3 情報の共有化

美術館員は、他館の逐次刊行物をどれくらい
読んでいるのか？

情報の蓄積と検索の問題／総目次

頒布先について

3. 利用者としての美術館

美術情報にアクセスするための逐次刊行物の検索について（今回は和雑誌に限定）

3.1 美術雑誌・紀要のタイトル検索

・美術雑誌データベース
（アート・ドキュメンテーション学会美術雑誌 SIG）
http://www.jads.org/db/bijutsu_zasshi/search.htm

※1,307 件。ただし、明治、大正、昭和戦前期の雑誌はよく調査されているが、比較的新しい雑誌や学会、美術館、大学等が発行する雑誌は収載されていない。
（アートトップ、絵、三彩、美術手帖など）

・東京文化財研究所蔵書目録 5
（上）和雑誌目録編・（下）和雑誌索引編
（2004 年 12 月末日現在）約 3,000 種

→東京文化財研究所ウェブサイトの「和雑誌データベース」
（最終更新日：2011 年 3 月 25 日 /
登録数：タイトル数 2,850 種、82,909 冊）

3.2 雑誌記事・論文記事の検索

・日本美術年鑑（東京文化財研究所 各年で調査 / 最新：平成 21 年版=2008 年 1 月～12 月の定期刊行物所載文献を収録）

→東京文化財研究所ウェブサイトの「美術関係文献検索」
※『日本美術年鑑』掲載文献に、さまざまな理由で年鑑に掲載されなかった文献を加えたもの。
校正中のためにデータに不備がある場合がある。
特に 1997 年、2004 年の展評は不完全。また、Mac には対応していない。
最終更新日 2011 年 2 月 25 日
古美術関係 1878 ～ 2006 年、
近現代美術関係 1935 ～ 2006 年 474,803 件

・雑誌記事索引 人文・社会編（国立国会図書館 1995 年まで冊子体で刊行）

→国立国会図書館ウェブサイトの「雑誌記事索引」
※美術雑誌以外の雑誌に掲載された雑誌記事を調べることができる

・総目次 / 目次総覧 / 総索引など

主なもの
美術関係雑誌目次総覧，小林忠編，国書刊行会，2000.5
「白樺」総目次 [複製版「白樺」の別冊]，深萱和男編，
臨川書店，1972.8 等々

3.3 美術雑誌の所在の検索

・美術図書館横断検索（Art Libraries' Consortium）

<http://alc.opac.jp/>

・NACSIS Webcat（国立情報学研究所）

<http://webcat.nii.ac.jp/>

・NDL-OPAC（国立国会図書館）

<http://opac.ndl.go.jp/>

3.4 パソコンによる雑誌記事・論文記事の申請・入手

・国立国会図書館の登録利用者制度
→郵送複写サービス

4. 整理・保管について

・他館が刊行した逐次刊行物

→整理・保管のためのスペースや人員があるのかどうか

・自館が刊行した逐次刊行物

→実は、自館の逐次刊行物を一番使うのは自分たち

5. 最後に

美術館にとって「逐次刊行物」とは？

美術館の活動の実態を反映しているのは、逐次刊行物なのかも知れない。

逐次刊行物に表れているのは、展覧会のような目立つ活動だけではない、外からは見えにくい、日々の地道な活動とその有り様なのかも知れない。

逆に言えば、逐次刊行物は、美術館がどんな活動をしているのか / してきたのかを知るための唯一の手がかりでもある。

逐次刊行物を編集・制作する時に、私たちが持つのは、その時々で消費される情報という意識であるのか、永く残すべき記録という意識であるのか？

美術館に戻った時、自館の刊行している逐次刊行物を手に取って、今どうなっているのか、昔はどうだったのかを考えましょう。

1. AML 美術館の中の図書室は図書館界の中のどこに位置するのか

図書館の「館種」と職能組織

「公共」「学校」「大学」「専門」

専門図書館協議会

アート・ドキュメンテーション学会

ALC : Art Libraries' Consortium

ARLIS : Art Libraries Society

2. 書誌情報の流通と共作・共有・共用

“資料”が使えるとはどういうことか
5つのポイントを整理しておこう

Publishing 資料の出版

Distribution 資料の配付 / 頒布

Cataloging 資料の目録化 (書誌データの作成)

Dissemination 書誌情報の配布 / 流通

Holding [公開可能を前提とする] 資料の保有

労働集約型と考えられる Cataloging について

「書誌情報」はシェアするもの

なぜならば…

図書館の蔵書「目録」と美術館の藏品「目録」
Copy と非 Copy(Uniqueness)

一冊の本には一つの書誌情報が作成されれば、

← あとは…Copy cataloging
コピペもあり [というよりもコピペが基本]

書誌情報は

共作して、共有しながら共用する

共有 share とは
whole cake を
みんなで作り
そして、いただくイメージ



書誌データ共用装置としての書誌ユーティリティ
bibliographic utility

日本 : NACSIS-CAT

→ 4.2.2 目録を考える—書誌データの作成…
→ 6. OPL の見切りについて—何を残すか…

3. 現代の図書館、ホットな話題 インターネットと図書館—相克は「館」の開放か希薄化か

3.1 旧来の文献アクセス

多くは、論文を読んでその註または参考文献を辿って
(芋づる式に) 探し始める ≡ 既知検索

OPAC(自館の、国立国会図書館、Webcat、ALC、地
元の図書館、などなど) を検索

所蔵確認ができたなら所蔵館へ出向いて閲覧、Get!

3.2 Open Access の登場

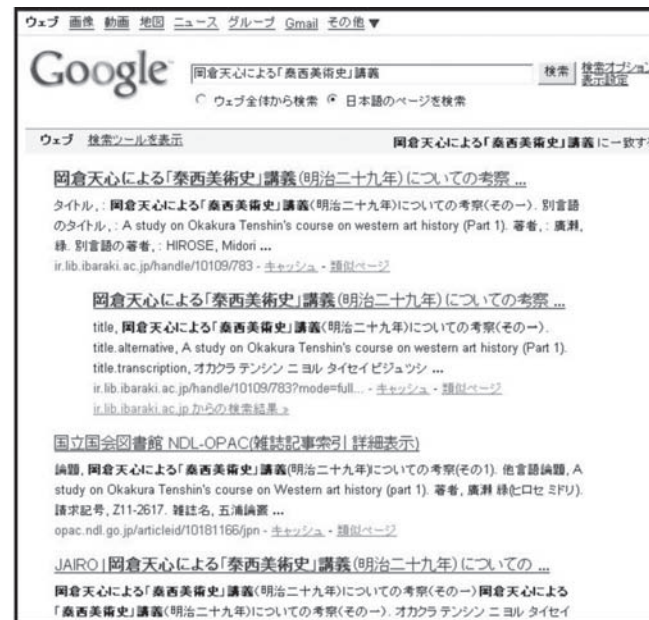
機関リポジトリ (IR: Institutional Repository)
JAIRO (機関リポジトリ ポータル
Japanese Institutional Repositories Online)
CiNii

経由で文献アクセスして、
公開サーバ上の全文ファイルを Get !

3.3 Deep Web 浮上せよ — Google クロール済みの CiNii

ググって全文 PDF 等 Get !

例:「岡倉天心による「泰西美術史」講義(明治二十九年)
についての考察 (その一)」



可視性 (visibility) 向上のための工夫、努力、競争
—publish of perish は STM の世界だけでなく
評価の時代に入った美術館

← 業界内評価を越えなければ
UAP: Universal Availability of Publications なのだ !

3.4 相克は「館」の開放か希薄化か

「図書館には Google では探せない資料がある、だから
図書館を使おう、そうしたら図書館は生き残れる」

↓
「図書館が提供できる資料は全部 Google で検索できる
ようにしよう、そうしたら図書館を使うだろう、つい
でに図書館資料をデジタル化して web に公開しよう、
すべてのデジタル化が終わるまでは、そのプロセスの
過程において [のみ] 図書館は生き残るだろう」

↓
利用者はデジタル化された資料が、図書館だろうが
CiNii だろうが IR だろうが、「誰の提供か」は意識し
ない

参考:

「電子図書館と「館」の希薄化 - 物理的な、あるいは電子的な」
Min2-fly(last update 2008-05-16)

<http://www.myopenarchive.org/documents/swffull/61>

国立情報学研究所 "NIIPress07_4-1".

http://www.nii.ac.jp/kouhou/NIIPress07_4-1.pdf

4. AML の資料論と組織化論

4.0 AML における各論に入る前に —何が困難なのか、課題なのかを考える

資料論	≡	資料知識
組織化論	≡	ノウハウ
環境	≡	人・もの・金・空間
ユーザー	≡	誰のための
Goal	:	ミクロとマクロ
貢献	:	国内 美術界 学術 一般 海外

4.1 AML における資料論

今回のセミナーはどちらかというと
AML の資料論から展開
「展覧会カタログ」「逐次刊行物」「二次資料」「一次資料」

AML の資料の多様性: 以下に主な参考文献

Pacey, Philip ed. *Art Library Manual: A Guide to
Resources and Practice*. Bowker, 1978.

Ford, Simon ed. *Information sources in art, art history
and design*. K.G. Saur, 2001.

Benedetti, Joan M. ed. *Art Museum Libraries and
Librarianship*. Scarecrow Press, 2007.

水谷「美術情報」『情報探索ガイドブック情報と文献の森の
道案内』勁草書房、1995.9、所収

4.2 AML における組織化論－「分類」と「目録（書誌データの作成及び OPAC について）」の要点

4.2.1 分類を考える — 図書館分類は「集類」

同種の主題の本を書架の同一の箇所を集める「便宜的」な方法であって、植物分類のような「学問分類」とは異なる。「分類」というより「集類」である。

参考：

『情報選択の時代』 リチャード・S・ワーマン著 松岡 正剛 訳
五つしかない情報の組織化の方法「究極の五つの帽子掛け」

- L. 位置 (location)
- A. アルファベット (alphabet)=50 音順
- T. 時間 (time)
- C. カテゴリー (category)≒分類
- H. 連続量 (hierarchy) 小→大など

Latch＝掛け金

「同一の箇所に集める」ことの必要性

ある： ブラウジングのため
検索のための目録が整備できないため
書架に余裕があるから
分類配架は常に 30% の空白が必要

ない： 検索のための目録が整備できる
OPAC が使える
検索画面でブラウジング
請求記号 (Call number) に従って
現物に到着可
書架に余裕無し
最も効率的な配架は空白のいらぬ配架
非分類配架 ≡ eg. 時順配架

以上を勘案して分類を考える
採用するならばNDC、以下1～2桁

参考『東京都現代美術館所蔵展覧会カタログ目録 本文編 / 索引編』(同館、2000-2001)

4.2.2 目録を考える

一書誌データの作成から OPAC の公開へ

考えておくべき前提 ← 何にマンパワーを注ぐことが最大多数の最大幸福を生むか

- ・他館刊行物、商業出版物の書誌データはコピーペしてExcel、FM、図書館システム、何でも良いから貯める 盗用も可也 公開 / 検索のための手段 / 方法 / 工夫は多様にある
- ・自館刊行物の書誌データは、発行館の他にないと思いい作成する
- ・もしくは、発行館が作成せず、公開 / 検索可能な館へ委ね、共作、共有、共用のラインに載せることを考える

問1 書誌データ作成の環境

A: 全蔵書の書誌データを作成し公開するための人・金・空間がある
B: 自館刊行物に限れば書誌データを作成し公開するための人・金・空間がある
C: 蔵書の書誌データを作成する人・金・空間がない
A ならば:
既成図書館システム導入、OPAC 公開、NACSIS-CAT 参加、それが無理でも ALC に参加しよう

B ならば：
既存図書館システム導入、OPAC 公開、ALC に参加
しよう、それが無理でも ALC に寄贈しよう

B ならば：
自館刊行物データをテキストで良いから HP に掲載公開しよう、その上で ALC に寄贈しよう

Cならば：
とりあえず、分類して棚に並べよう
そのためには何が必要で何が不要かをぎりぎりまで考
えよう
ただし、自館刊行物を国立国会図書館と
NACSIS-CAT に参加の ALC のいずれかに寄贈しよう
自館刊行物が自館外のどこかで、国立国会図書館、
Webcat、ALC で検索可能になれば良い

問 2 資料へのアクセス路要求

A：自席の PC で検索して
館の蔵書が把握できればよい

B：主題ごとに分類された棚の前に行って
本を探したい ブラウジングしたい

A ならば：
OPAC 必要 棚が無くても何とかなる

B ならば：
OPAC 不要 しかし 分類配架が必要 棚に余裕が必要

問 3 書誌データの公開要求

A: 検索は美術館内部だけで良い インターネットに
公開するなんてとんでもない

B: 検索は広く世界から OPAC はインターネットに
公開するのが当然

Aならば：
イントラネットでhtmlを作り Ctrl+Fでも検索可
元はExcelでもFMでも何でも良い

Bならば：
最低限の既存図書館システムの導入を OPAC 公開
サーバは ASP でも可 ALC の半数は opac.jp

5. 美術館の中のライブラリの機能構造化のための尺度を考える

マンパワー

蔵書の量

保管のスペース

利用者像

美術館のパブリッシング力

他機關依存可能性

6. OPL の見切りについて — 誰の、誰による、誰の
ための図書館 何を残すか、何を担うか

OPL : One Person Library / Librarian

One Person を確保するための作戦を

当面の Goal として

「自館刊行物を共有財にするための課題と責任」

から発想してみよう！

これを実現すれば

日本の美術館の MP の UAP は実現する

第Ⅳ講 「電子的リソース（二次資料）」

2011.12.17（土）9:30—10:10 於、奈良国立博物館 講堂

水谷 長志（東京国立近代美術館）

1. 資料・情報のn次性—「第二の知識」 藤川正信著『第二の知識の本』 新潮社 1963

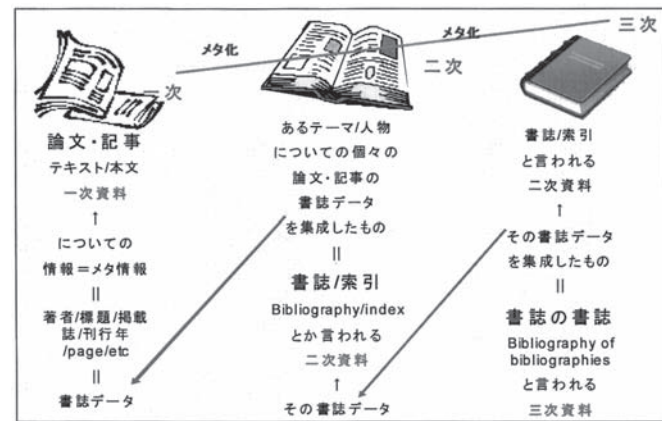
Knowledge is of two kinds. We know a subject ourselves, or we know where we can find information upon it.

James Boswell. *The Life of Samuel Johnson*. 18 Apr. 1775.

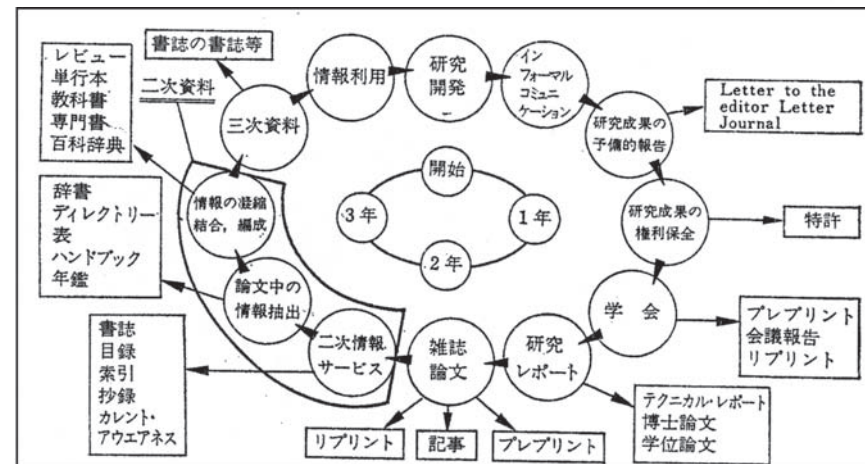
「知識には二種類あって、我々は或る主題を自分で知るか、それともこの主題についての情報がどこでえられるかを知るかです。[我々が何かを調べようと思う時にまず最初にせねばならぬことは、いままでにどんな本がこの主題を取扱ったかを知ること、我々がカタログを検索したり、図書館の書物の背表紙を通覧するのはこのためです。]」

↑

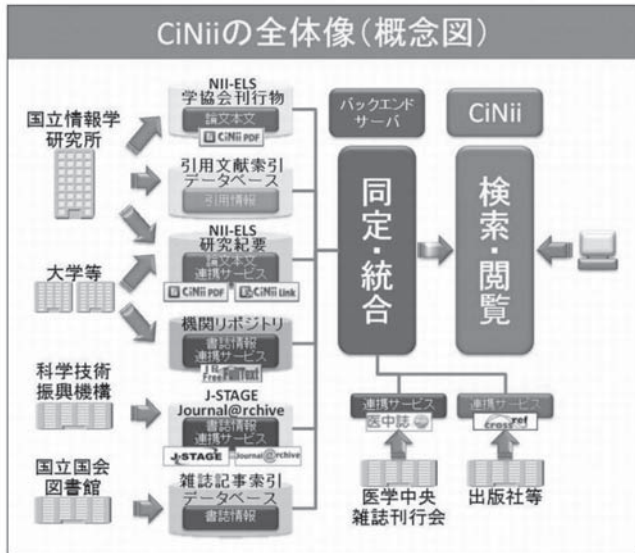
図書館機能の本質：
忘れてはならないこと / 頭に入れておくこと



K. Subramanyan の Scientific Literature 学術の螺旋的發展



2. レファレンス・ツール概観*



データベース名 (提供機関)	略号	解説	収録件数/収録雑誌
NII-ELS 学協会刊行物 (国立情報学研究所)	NII-ELS	◎論文本文へのリンクあり ◎抄録があれば収録 国内の学協会が発行する学術雑誌に掲載された論文について、ページをそのまま画像データ(PDF形式)として蓄積。本文の参照を可能にしたデータベースです。 ※本データベースの一部は科学研究費補助金(研究成果公開促進費)データベース(学会発表プレプリント電子ファイルおよび電子図書館蔵書データベース、臨床症例データベース)の交付を受けて作成しています。 収録期間:雑誌により異なります(電子化開始時期と期間による)	約292万件 収録雑誌は一覧
NII-ELS 研究紀要 (各大学の共同入力)	NII-ELS	◎一部論文本文/外部リンクあり ◎一部抄録あり 国内の大学等が刊行する研究紀要に掲載された記事情報を収録したデータベースです。 収録期間:雑誌により異なります	約96万件 収録雑誌は一覧
引用文献索引データベース (国立情報学研究所)	CIF書誌 CIF(利用: 注1注2)	◎引用情報があれば収録 国内の自然科学分野の学術論文誌・学協会刊行物に掲載された論文について、論文とその論文が引用している文献との関係がわかるように作られたデータベースです。 収録期間:1992年～、雑誌により異なります	書誌:約147万件 引用:約1593万件 収録雑誌は一覧
雑誌記事索引データベース (国立国会図書館)	NDL: 注1注2	◎書誌情報のみ 国立国会図書館が収集する国内刊行の雑誌のうち、学術誌・大学紀要・専門誌を中心として、人文・社会・科学・技術・医学・薬学と、あらゆる分野の記事に関するデータを収録した国内最大の記事索引データベースです。	約907万件 収録雑誌は一覧 (国立国会図書館蔵書目録参照)
機関リポジトリ (各大学)	IR: 注1	◎論文本文へのリンク	約23万件
J-STAGE, Journal@rchive (独立行政法人科学技術振興機構)	J-STAGE Journal@rchive: 注1	◎論文本文へのリンク	約4万件

2009年4月現在

**CiNii のこと 国立情報学研究所 NII 学術系コンテンツサービス http://www.nii.ac.jp/index.php?action=pages_view_main&page_id=84

を一度ご覧下さい 特に IR、JAIRO、CiNii、PORTA(NDL) の関係を整理しておくとかかと重宝

種類		紙媒体:事例	Web 媒体:事例
一般的 包括的 二次資料	全国書誌	『日本全国書誌』 Japan/MARC National Bibliography など	国立国会図書館 OPAC
	販売書誌	『日本書籍総目録』『出版年鑑』 Books in Print など	http://www.books.or.jp/Amazon?
	所蔵目録	『国立国会図書館蔵書目録』 など	国立国会図書館 OPAC
	総合目録	『学術雑誌総合目録』 など	Webcat
	叢書集成索引	『現代日本文学総覧シリーズ』 など	日外アソシエーツ
	一般記事索引	『国立国会図書館『雑誌記事索引』 など	国立国会図書館雑誌記事索引 NII CiNii**
	百科事典	『平凡社世界百科事典』 など	オンライン百科事典
専門的 関連主題の 二次資料	主題書誌 個人書誌	掲載媒体は様々	
	専門記事索引誌 専門記事抄録誌 A&I Service (Abstracting & Indexing)	『日本美術年鑑』に掲載のもの Art Index BHA ABM DAAI etc.	東文研「美術関係文献検索 (試験運用版)」 Art Index BHA ABM DAAI etc.
	総目次・総索引 総目次の総覧	『みづゑ』ほか様々 『美術関係雑誌目次総覧』国書刊行会 『現代の眼』 『日本雑誌総目次要覧』	東近美アートライブラリ閲覧端末『現代の眼』総目次検索***
	専門事典・便覧	『新潮世界美術辞典』 TDA	OAQ: Oxford Art Online
	三次資料	書誌の書誌	『美術家 書誌の書誌』 勉誠出版
参考図書の解題書誌		『日本の参考図書』 Guide to Reference Books Guide to the Literature of Art History	

3. 日本の美術界の二次資料とその電子化 上記表斜体

*** 個別館 OPAC の中の (雑誌) 記事情報 東近美 OPAC の場合：
東近美開催展カタログ所収論文等記事 / 東近美研究紀要 / 現代の眼 / 愛知県美研究紀要 / 構造 / 近代画説 / 西洋美術研究 / 横浜美研究紀要 / 美術フォーラム 21 / 西美研究紀要 etc.

4. 海外の美術界の二次資料とその電子化 上記表斜体

Matsumoto Shunsuke

09478 Shunsuke Matsumoto exhibition 1986. Tokyo: National Museum of Modern Art (5 April-15 June 1986)/Iwata, Japan: Iwatekenmin Kaikan (28 June-20 July 1986)/Shimonoseki, Japan: City Art Museum (26 July-24 Aug. 1986). Organized by Tokyo Shim-bun and Iwate Nippo. Kunio Motoé, Tōru Asano. 244p. Also in Japanese. 304 illus. (159 col.) biog. bibliog. Catalogue to an exhibition of paintings and drawings by Shunsuke Matsumoto (1912-48), with two essays. Motoé discusses Matsumoto's choice of style and subject matter, with particular emphasis on his cityscape paintings, and noting the influence on him of Modigliani, and the montage technique which is reminiscent of Hideo Noda. There is also a short essay by Asano (in Japanese only) on Matsumoto's essay "A living painter".

図6 A B M抄録例<展覧会カタログ>

「松本竣介展」1986 於、東京国立近代美術館 他
Vol. 19, No. 2(1988)より

表1 主要抄録・索引誌およびオンライン・データベース

タイトル	RAA	Art Index	ABM(SOMA*:1980-7)	RLA	BHA
プロデュース 冊子付刊行 冊子付刊行頻度 収録枚数/年 収録誌数/巻 収録誌数/年 累積索引版	CNR5**, FRA V.1(1910)-V.8(1980) 4/年 +/- 10,000 +/- 500 +/- 2,100	H. W. Wilson, USA V.1(1930)+ 4/年 +/- 20/23,000 +/- 230 annual index	ABC-CLIO, GBR V.1(1969)+ 2/年 13,000 +/- 300 500 5 year index (1969-84) 3 year index (1985-)	J. P. Getty Trust, USA V.1(1970)-V.15(1990) 2/年 +/- 10,000 + 500 + 300 V.1/4(1975/79) V.6/10(1980/84)	Getty, USA: CNR5*, FRA V.1(1991)+ 4/年 24,000? *** 208/267(Vol.1,Nel/2) 4,000?*** annual index (1992?-)
Index: Author Index: Subject Index: その他	○ ○ French Artists	○ Subjectと混記 ○ English Book Review Index	○ ○ English Periodicals Museum and Gallery	○ ○ English Journal	○ English / French Journal
ディストリビュータ オンライン・データ 更新頻度 データベース収録	QUESTEL(Chap.58), mini! 1973+ 4/year 208,000 QUESTEL	WILSONLINE, CD-ROM 1984+ 2/week; CD(4/yr) 2/week	DIALOG(File56) 1974+ 2/year 2/year	DIALOG(File 191) 1973+ 2/year	DIALOG(File 191), QUESTEL 1973+ 4/year

水谷「美術研究における抄録・索引誌の動向—BHA の創刊をめぐつて」『ファッションドキュメンテーション』2号, 1992.6, p.39-54.

東京国立近代美術館アートライブラリ **** にて利用可能海外美術情報データベース
http://www.momat.go.jp/art-library/foreign_art_db.html

■ABM: Art Bibliographies Modern on WEB/ ProQuest 版
⇒近現代美術のための抄録・索引情報 / 974-Current【詳しくは】 by ProQuest

■Avery: Avery Index to Architectural Periodicals/ ProQuest 版
⇒建築のための抄録・索引情報 / 934-Current【詳しくは】 by ProQuest

■DAAI: Design and Applied Arts Index on WEB/ ProQuest
⇒デザインのための抄録・索引情報 / 973-Current【詳しくは】 by ProQuest

■IBA: International Bibliography of Art/ProQuest 版
⇒西洋美術全般のための抄録・索引情報、BHA の継続誌 / 008-Current【詳しくは】 by ProQuest



■の ABM、Avery、DAAI、IBA/ ProQuest 版は横断検索可能

□BHA : Bibliography of History of Art /RILA: Répertoire de la littérature
de l' art

⇒西洋美術全般のための抄録・索引情報/1975-2007【詳しくは】by AHIP/J.

Paul Getty Trust

●OAO: Oxford Art Online

⇒旧グローブ社美術事典のWEB版 + The Oxford Companion to Western

Art + Encyclopedia of Aesthetics + The Concise Oxford Dictionary of Art

Terms【詳しくは】 OUP

**** 美術図書館学、アート・ドキュメンテーション関連文献のための
のクリアリングハウス機能を持ち、特に ARLIS、VRA 関連文献を
網羅的に収集している

国立西洋美術館研究資料センターで利用可能な他の海外書誌情報データベース

- Art Index
- Art Index Retrospective: 1929-1984
- Art Sales Catalogues Online

※JSTOR は東京国立近代美術館、国立西洋美術館とも利用可能
詳しくは第V講(川口)にて

5. 日本の美術館の資料活動が目指す二次情報提供サービスの構築について

問1 日本の美術館が果たす二次情報提供サービスの主体

A：東京文化財研究所の活動（研究資料データベース検索システム）と協調路線を強化する
<http://archives.tobunken.go.jp/internet/index.html>

B：とりあえず東京文化財研究所は想定しない

B: で仮説するときの基本体

総論： 自館刊行物を共有財にするための課題と責任
Access to Museum publications

「自館刊行物へのアクセス可能性は保証されているか」を問う

問2 いかにより館刊行物へのアクセス保証するか

A：自館刊行物へのアクセスを自館で保証する
→ がんばりましょう！

visibility の向上はさておいて

B: 自館刊行物へのアクセスを他館の公開ライブラリに委ねる

→ 国立国会図書館へ寄贈する

→ ALC 参加館へ寄贈する

問2がA:B:だとしても、「アクセス可能性は保証されているか」をさらに問う

問3 アクセスの質を高める

A：ものとしての刊行物があれば良い
→ 棚に並んでいれば良いじゃん

B：ものとしての刊行物の目録情報があれば良い
→ 問2 B：への処方でもまず可能

C：中身（収載論文／記事にまで及んだ）の書誌情報の検索可能性を保証しなければ、
「アクセス可能性は保証」とは言えない
と、レベルを上げる
→ これからの課題

試み： 前記の *** 個別館 OPAC の中の (雑誌) 記事情報 東近美 OAPC の場合：
東近美開催展カタログ所収論文等記事 /
東近美研究紀要 / 現代の眼 / 愛知県美研究紀要 / 構造 / 近代画説 / 西洋美術研究 / 横浜美研究紀要 / 美術フォーラム 21 / 西美研究紀要 etc.

計画： 東京国立近代美術館機関リポジトリ (試作中)

- ・全美加盟館のニュース、紀要、年報 所載論文 / 記事情報の一元的検索機能
- ・全美加盟館の展覧会カタログ 所載論文 / 記事情報の一元的検索機能
- ・上記対象の全文データ公開

すなわち 東京国立近代美術館機関リポジトリ
独立行政法人国立美術館機関リポジトリ
〇〇美術館機関リポジトリ
→JAIRO → CiNii

6. 自館刊行物を自館所蔵作品に代えてその Accessibility を問う

ここまで語ってきた二次資料論を美術館の メインストリーム 本論である所蔵作品情報に敷衍して考えてみる

所蔵作品情報への Accessibility を「市井の一人」として問うこと

- ・あなたが住んでいる市の、区の、町のアート館の所蔵品情報はどのようにして得られますか？
- ・そのアート館のホームページに所蔵作品情報は公開されていますか？
- ・所蔵作品情報を掲載してる刊行物、例えば『年報』はどこに行けば見られますか？

その美術館にライブラリはありますか？
その美術館の近くの公共図書館に『年報』はありますか？
『所蔵品目録』は刊行されていますか？
どこに行けば見られますか？
その美術館にライブラリはありますか？
その美術館の近くの公共図書館に『所蔵品目録』はありますか？

7. 終わりに

自館コンテンツ

- ・所蔵品
- ・自館刊行物
- ・所蔵資料
- ・展覧会等催事コンテンツ
- ・教育普及活動 etc.

これらすべての公開と Accessibility を問い、
その活用モデルを再構築する

根幹にあるのが
美術館の
情報資料活動

1. はじめに

第Ⅳ講で紹介されたBHAなどの書誌・索引を駆使して、あるいは単純に「芋蔓式」でみつけた文献は、実際にはどのように手に入れられるだろうか。現物にあたって確認するのが基本だが、たとえ現物が身近になくても、大学に所属する教員や学生ならば附属図書館を通じて他大学から取り寄せることが可能だ。ところが一旦大学を離れ美術館に就職すると、そうした手段に頼ることはできなくなる。美術館の学芸員は、どうすれば文献を入手できるだろうか。

近年は、学術雑誌の電子化とインターネット公開が大きな進展を見せており、美術分野の文献も増えつつある。フリーでアクセスできる電子ジャーナルは、美術館の学芸員にも活用できる共有資源だ。本講では、ウェブ上で公開されているそれらのリソースを中心に、その探し方や使い方を具体的にみていきたい。

＊ BHA (Bibliography of the History of Art)
<<http://library.getty.edu/bha>>

2. 雑誌

2.1 国立国会図書館の蔵書検索から本文（フルテキスト）へ

探している文献が日本語で書かれている場合は、まず国立国会図書館（NDL）の蔵書検索システム「NDL-OPAC」にあたってみることをおすすめしたい。運よく当該文献の電子版が見つかることもあるし、少なくともこのシステムを操作することで（本講の範疇ではないが）遠隔複写サービスの依頼を簡単に行うことができる。（後述の通り2012年1月より「国立国会図書館サーチ（NDL Search）」に統合されることが予告されている。）

雑誌論文であれば、NDL-OPAC メイン画面から「雑誌記事索引の検索／申込み」を選択し、あらためて探している文献を検索する。求める文献情報がヒットし

たら、その詳細画面を表示させよう。詳細表示では、「他のデータベースへ［よむ！さがす！］」というアイコンが出現するので、それをクリックすると新たに画面が立ち上がる。この画面を「中間窓」というが、そこで「ベーシックサービス」内の「本文」という項目に情報が表示されていれば、ウェブ上で本文（フルテキスト）が入手できるということを意味する。「Go」ボタンをクリックすることで、その提供元サイトへと導かれる。

このような、記事索引などの検索結果から、新たに出現する画面（中間窓）を介して、最適なリンク先（ウェブ資源など）へと導く仕組みのことを一般に**リンク・リゾルバー**（リンクを解決する人、の意）という。リンク・リゾルバーは大学図書館等がその利用者のために導入する有料サービスの一種で、たとえば中間窓がウェブ上で公開されていても、リンク先が当該図書館のライセンス契約誌の場合、外部からアクセスすることはできない。第三者にとっても有益なのはリンク先が**オープンアクセス・ジャーナル**（無料で閲覧・ダウンロードできる電子ジャーナル）の場合で、ここに紹介したNDL-OPACから本文へと辿っていく使い方は後者のケースを念頭に置いたものである。

＊ NDL-OPAC (National Diet Library – Online Public Access Catalogue)
<<http://opac.ndl.go.jp/>>
2012年1月以降は、「国立国会図書館サーチ（NDL Search）」に統合される。

2.2 「どの雑誌が電子化されているか」を調べる

例えば探している文献が『美學』に収録されているというとき、「『美學』という雑誌は電子化されているか」「電子化されているとすれば何号から何号までか」といったことを調べるアプローチの仕方もある。そのような場合は、Googleで発行元のサイトを確認するのも一つの方法だが、ここではGoogle以外の方法を紹介しよう。実践女子大学図書館が運営している「日本語学術雑誌情報源ナビJJRNav

JJRNav

洋雑誌については、レーゲンスブルク大学図書館が運営する「Electronic Journals Library（EZB）」が同様のサービスを提供しているが、こちらでは有料の電子ジャーナルも網羅されている（無料か有料かの区別はされている）。EZBは運営元のレーゲンスブルク大学サイトのほか、美術史の文献情報総合サイト「arthistoricum.net」上でも利用可能だ。欧米圏では雑誌の電子化が日本よりはるかに進んでおり、19世紀末の美術雑誌『**パン**』や『**ユーゲント**』はすでにオンラインで全文アクセス可能だ。

＊ JJRNav (Japanese Journal Resources Navigator)
<<http://jcross.jissen.ac.jp/atoz/index.html>>

＊ Electronic Journals Library (EZB)
<<http://rzblx1.uni-regensburg.de/ezeit/>>

＊ arthistoricum.net
<<http://arthistoricum.net/>>

＊ arthistoricum.net 内のEZB
<http://www.arthistoricum.net/no_cache/en/recherche/recherche/ezb/>

2.3 「JSTOR」とは

前項で紹介した「電子ジャーナル図書館」（EZB）をみていくと、雑誌名に続いて「via JSTOR」という文言が頻繁に出てくるのに気づく。「JSTOR経由で利用可能」ということだが、そもそもJSTORとは一体何だろうか。

JSTORは、今や欧米圏の美術研究者の間ではGoogle、BHA、KubiKat（ドイツ系の美術図書館連合OPACで、論文単位の検索も可能。URLは、

<http://www.kubikat.org/>）とともに美術研究の基本ツールとみなされる学術雑誌アーカイブのことである。有料だが、『**アート・ブリテン**』、『**パーリントン・マガジン**』、『**メトロポリタン美術館紀要**』など英米圏の主要165誌が創刊号から過去1～5年前の号まで全文利用できるスケールの大きいアーカイブである。美術館に対しては大学より有利な価格体系で提供されており、年間契約料はきわめて安価だ。

全文検索機能に対応しており、本文中はもちろん図版キャプションの語句でも検索可能である。ヒットした論文のフルテキストはPDFファイルとして閲覧・ダウンロードできる。国内で契約している公開型の美術図書館は東京国立近代美術館アートライブラリ、国立西洋美術館研究資料センター、国立新美術館アートライブラリーなどである。

さらに2011年9月以降、米国内で発行された1923年以前の雑誌、その他の国で発行された1870年以前の雑誌については無料で公開することが発表された。『**ボストン美術館紀要**』の初期の発行分などは無料でアクセスできるので、是非試してみてほしい。

＊ JSTOR
<<http://www.jstor.org/>>
契約・料金等の詳細については下記を参照のこと：
<<http://www.usaco.co.jp/products/jstor/>>

3. 図書

3.1 和図書のフルテキストを探す

雑誌論文ではなく、単行書を探しているときにはどうすればよいだろうか。今日では、身近な図書館になく、古書店にみつからなくても、運よく電子版の方がみつかることもある。近年、**機関リポジトリ**（大学などがその知的生産物を電子化し保存・公開するために設置するシステム）が普及し、また世界中の図書館が競うように蔵書の電子化を進めているからである。



このようなデジタル資源をサイトごとに検索するのは手間だが、総合的に検索するポータル・サイトが発達しつつある。国立国会図書館が運営する「国立国会図書館デジタルアーカイブポータル（PORTA）」もその一つだ。2012年1月からは「国立国会図書館サーチ（NDL Search）」に統合される予定である。検索画面でカテゴリ「デジタルアーカイブ」のみをチェックして（PORTAの場合）、あるいは「デジタルアーカイブ」のボタンを反転させた状態（NDL Searchの場合）で検索すると、フルテキストが公開されている書籍のデータがヒットする。例えば『**稿本日本帝国美術略史**』やフェノロサの『**美術真説**』などの電子版が公開されていることが分かる。

3.2 洋図書のフルテキストを探す

欧州では、欧州内の専門機関で公開されている資源を総合的に検索できるポータル・サイト「europeana」がある。例えば**ジョルジョ・ヴァザーリ**『**芸術家列伝**』の原書がウェブで全文公開されていることなどはこのサイトで確認できる。

一方、美術史の文献に限定すると、先述の arthistoricum.net が著者別にまとまっていて探しやすい。トップページから「Thematic Portal: History of Art History」、「Resources: Digital Art Literature」とたどっていくと、著者名リストが表示され、**ジョン・ラスキン**、**ヤーコブ・ブルクハルト**、**ハインリヒ・ヴェルフリン**ら著名な美術史家の名が散見する。これは、ハイデルベルク大学図書館が所蔵する美術史特別コレクションのなかから電子化された書籍を著者名順に列挙したものである。著者名をクリックするとどの文献が電子化されているかが一目で分かり、最終的にはその提供元サイトへとアクセスすることができる。

＊ 国立国会図書館デジタルアーカイブポータル (PORTA)
<<http://porta.ndl.go.jp/>>

＊ 国立国会図書館サーチ（開発版）
<<http://iss.ndl.go.jp/>>

＊ europeana
<<http://www.europeana.eu/portal/>>

＊ arthistoricum.net 内の美術史文献
<<http://www.arthistoricum.net/en/themenportale/kunstgeschichte/resources-digital-art-literature/>>

4. まとめ ～文献をどうやって入手するか～

4.1 日本語の文献を手に入れたい

まず NDL-OPAC（または NDL-Search）にあたってみる

→ リンク・リゾルバーから本文（フルテキスト）へ

あるいは

→ 遠隔複写申込み（要利用者登録、登録料は不要。複写・郵送料は有料）

4.2 「どの雑誌がウェブで入手できるか」を知る

和雑誌：JJRNavi

洋雑誌：EZB（Electronic Journals Library）

4.3 フルテキストを手に入れるには

電子ジャーナル：JSTOR（要契約、有料）

和文献：PORTA

洋文献：europeana、arthistoricum.net

参考サイト

「オープンアクセスジャーナルリンク集」（国立国会図書館リサーチ・ナビ）2009年5月10日
<http://rnaui.ndl.go.jp/research_guide/entry/theme-honbun-400309.php>

「無料電子雑誌論文の見つけ方」（国立国会図書館リサーチ・ナビ）2009年5月10日
<http://rnaui.ndl.go.jp/research_guide/entry/theme-honbun-400134.php>

「著者所属機関の機関リポジトリで灰色文献を探す」（国立国会図書館リサーチ・ナビ）2009年5月10日
<http://rnaui.ndl.go.jp/research_guide/entry/theme-honbun-400156.php>

国立西洋美術館研究資料センター「学術情報案内」
<<http://www.nmwa.go.jp/jp/education/resources.html>>
本稿で紹介したもの以外でも、西洋の売立目録のフルテキスト・アーカイブ等、当センターで利用できるリソースを紹介しています。

＊本稿に記したウェブページ URL は全て 2011 年 10 月 27 日現在。

1. 作品情報発信の現状（2005、2009-2011）

2005 年、情報・資料研究部会により、ホームページの状況調査を行い、348 館中 222 館から回答を得た。質問項目のうち作品情報の発信の有無については、78 館が「作品情報を発信」と回答した。ただし、この時の調査ではどのような方法で作品情報を発信しているのかということまでは不明である。2009 年から 2011 年のそれぞれ秋頃に、2005 年のアンケート調査に回答した 222 館を対象に、作品情報の発信の状況についての追跡調査を行った。

追跡調査では各館のホームページを目視で作品情報の発信の有無を確認し、作品情報の発信がなされている場合には、その方法として、「紹介」型、「リスト」型、「検索」型の 3 つに分類した。（各方法の詳細は後述する。）

2011 年の調査では、222 館中、156 館のホームページに「作品情報の発信」がある旨の記述があるが、うち、5 館は「準備中」、また 3 館は実際には作品情報の発信無し（所蔵作家の情報＝2 館、作品点数の情報のみ＝1 館）であった。作品情報を発信している館は増えてはいるが、微増である。

	2009	2010	2011
紹介	40	88	94
リスト	11	12	13
検索	26	37	39
準備中		2	5

「紹介」型で紹介されている所蔵作品の点数は、最小 2 点から数十点までであった。東博の「名品ギャラリー」、「e 国宝」等、画像と共に作品を紹介しているサイトが多い。

「リスト」型は所蔵作品の一覧が収蔵年度別で掲載されているケースが多く、作家別リストとしているケースもある。PDF ファイルでの公開もあった。（板橋区立美術館等）

「検索」型はキーワード入力して検索する方式と「索引」方式をまとめた。

「キーワード」方式は制作年代、作家名、作品題名等の検索キーワードから作品を探す方法であり、いわゆる「作品検索」といえば、この方法を連想するであろう。複数の条件設定ができる画面、簡単に検索できるような画面等が提供されている。（東京富士美術館、岩手県立美術館、秋田市立千秋美術館）

「索引」方式は主に作家名から作品を表示する方式であり、ジャンルや主題等から作品を検索できる館もある。（練馬区立美術館）

博物館ではジャンル、時代からの索引方式での検索が多く見られる。

ほかに特徴のある作品情報の発信の方法としては、「かごしまデジタルミュージアム」等の地方自治体の文化財等検索サービスを利用している館、「文化遺産オンライン」に作品情報を掲載している館、ブログサービスを用いて作品情報を発信している館がある。また、所蔵作品を有する 4 つの国立美術館の作品情報は「独立行政法人国立美術館所蔵作品総合目録」で検索可能となっている。（国立西洋美術館はさらに独自の検索システムを提供している。）

2. 作品情報発信の実際

作品情報の発信には大きく分けてつぎの 2 つ方法がある。

- ・作品情報を記したファイルを公開する方式
- ・データベースを使用する方式

2-1. 作品情報ファイルを公開し、全文検索する場合

ファイルの形式は HTML、PDF のいずれかとなる。HTML ファイルの場合、表示可能な文字は閲覧する環境に依存する。（特殊な文字を画像として埋め込む方法もあるが、見た目に不統一で美しくない。また、"Web フォント" という、サーバーからフォントをダウンロードして表示する技術もあるが、まだ一般的ではない。）PDF ファイルならば、ファイル中に使用しているフォントの埋め込みができるので、作品題名や作家の氏名等で表示できる文字種が多くなる。IPA が 2011 年に公開した人名フォントは無償で使え、字種も多いので、有用である。そのような意味では PDF ファイルで公開するメリットはある。一方で HTML ファイルの方が携帯電話からゲーム機、テレビまでさまざまな機器で閲覧可能という点では、PDF ファイルに対して優位である。

2-1-1. 作品情報ファイルの用意

PDF ファイルの場合

PDF ファイルの場合には、テキスト情報が埋め込まれた検索可能な形式が望ましい。（紙面をスキャンし、画像を PDF 形式とした文書もあるが、検索には向かない。）

PDF 形式で作品情報を作成するには WORD やファイルメーカー等のアプリケーションソフトの利用が考えられる。

ファイルメーカーの場合には、作品情報を構成する項目を画面上に作成、配置していけばよく、複数の作品情報の「リスト」と作品個別の「カード」の両方を作成できる。画像も張り込むことも可能である。（作品リストは、作成した項目から一覧表示したい項目を選択することで後から容易に作成できる。）

WORD ならば、1 ページ、1 作品となるように作品情報を記述すればよく、特別なことは特に無い。作品情報の区切りとして改ページを入れておけば十分である。

アプリケーションソフトから PDF ファイルの作成する際には、いくつかの設定がある。長期保存やより多くの閲覧環境に対応することを目的とした「PDF/A」が理想であるが、規格通りに作成するには手間がかかるので、最低限、以下の 2 点：

- ・PDF のバージョンは 1.4
- ・フォントは埋め込む

に留意するとよい。フォントを埋め込む場合にはフォントの配布に関するライセンスの問題が発生する場合があることに注意する。人名漢字等でより多くの文字種が必要である場合には、IPA が配布するフォントのようにライセンス上の問題が少ないものを採用する。なお、作品情報の改変等を防ぐためのセキュリティ設定を施すことが可能である。

HTML ファイルの場合

PDF の場合と同様に 1 作品 1HTML ファイルとすると作品単位で検索が可能となる。（複数の作品情報を 1 つの HTML ファイルにまとめて、リストとして公開する方法もある。）

HTML の規格としては XHTML1.1、文字符号化方式（文字コード）は UTF-8 がよい。

作品情報を HTML 形式で記述する＝作品情報のテキストに HTML 要素を付加していく（マークアップする）際に、HTML 要素の選び方や使い方において作品情報の「構造」や HTML 要素が本来持っている意味を意識すると、HTML ファイルを単にウェブブラウザで表示するだけではなく、後から「データ」として活用できるようになる。安易に表組みだけを用いたり、段落と改行だけでマークアップしたりすると、後から一括してデザインを変更したりする際に手間が増えるだけで

はなく、HTML ファイル化した作品情報の活用の幅が狭まってしまう。どんなマークアップの HTML ファイルであろうとも全文検索は可能であるが、HTML 要素にクラス名を適切に付けておくことにより、スタイルシートによるデザインの変更が容易になるだけでなく、HTML ファイルを後から自動処理することが可能となる。クラス名には「作品題名」、「技法」など日本語文字も使えるので、わかりやすく記述できる。

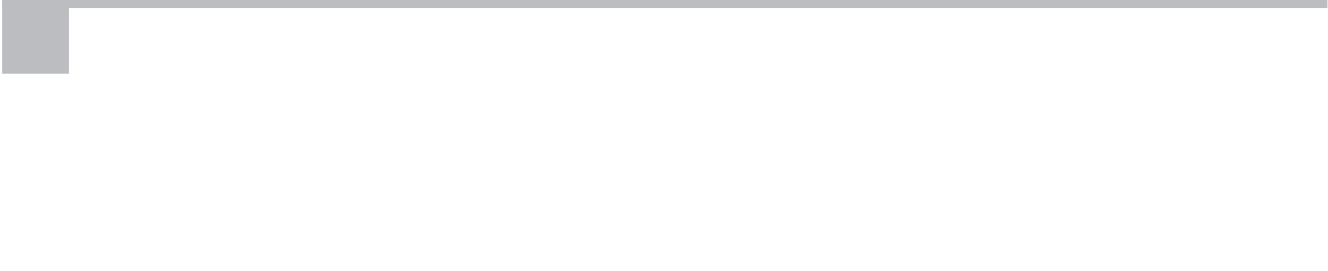
データとしての HTML ファイルを作成する場合、以下のような HTML 要素を主に使い、各要素にはデータ項目の名称をクラス名して付けておくといよ。

div 要素（情報のひとまとまりのブロック）
span 要素（行内での情報の 1 区分）
ul 要素（箇条書き）
※p 要素（段落）、br 要素（改行）は「作品解説」等の長いテキストを文章として段落分けしたり、改行したりという使い方のみとする。

作品情報の HTML 形式による記述例：

```
<div class=' 作品情報' id='ABC012345'>
<div class=' 作品題名'>道路と土手と塀 ( 切通之写生 )</div>
<div class=' 作家'>岸田劉生</div>
<div class=' 制作年'>大正 4 年</div>
<div class=' 技法・支持体・形状・員数'>油彩・キャンバス・額・1 面</div>
<div class=' 大きさ'>
  <span class=' 縦'>56.0</span> × <span class=' 横'>53.0</span></div>
<div class=' 初出'>2 回草土社展 ( 「切通しの写生」 ) ( 東京、玉木美術店 1916 )</div>
<div class=' 解説'>1 9 1 3 年ごろから西欧の古典絵画や北方ルネサンス絵画への傾斜を見せてきた岸田劉生は、この作品によって再び「ぢかに自然の質量そのものにぶつかって」いく姿勢を表明した。1 1 月の陽が当たる関東ローム層の赤土の坂の隅々に、古典絵画の感化を経た眼をもって、改めて自然に肉薄しようとする作家の視線が注がれている。当時の作家の住まいに近く、《代々木附近 ( 代々木附近の赤土風景 ) 》( 1 9 1 5 年 ) にも描かれたこの坂は、現在マンションに囲まれてすっかりたたずまいを変えてしまった。第 2 回草土社展出品作。</div>
</div>
```

作品情報を XHTML1.1 規格に則って作成した HTML ファイルは XML 形式のデータと見ることができる。これは、全文検索の対象とするだけではなく、作品情報の項目の前後関係や階層関係、記述に用いた要素の種類、項目の名前を変更したりすることができることを保証されるということであり、作品情報の再利用の可能性を確保するということにつながる。（「再利用性」とは、ほかのシステムでもデータとして利用可能というようなことである。）



なお、XML 形式とは

```
< 作品情報 ID="ABC012345">
< 作品題名 > 道路と土手と塀 ( 切通之写生 )</ 作品題名 >
< 作家 > 岸田劉生 </ 作家 >
< 制作年 > 大正 4 年 </ 制作年 >
< 大きさ > 56.0×53.0</ 大きさ >
  . . . 中略 . . .
</ 作品情報 >
```

のように情報を構成する項目を "< 作品題名 > . . . </ 作品題名 >" 等の項目の意味を表す「要素」で囲んで記す形式である。

2-1-2. 全文検索の実現

作品情報の HTML ファイルをインターネットに接続したウェブサーバーに置いた後、全文検索可能とするには以下のような方法がある。

“ 何もしない ” 方法

検索を Google に任せるならば、作成した作品情報のファイル群をインターネットに公開されているウェブサーバーに置き、Google からの検索インデックスを作成するためのアクセス（“ ロボット ” によるアクセス）を受け入れるようにすれば（実際には、特に何も設定しなければ）、しばらくすると Google で PDF ファイルが検索できるようになる。

検索対象として指定したウェブサイトのみを検索対象とする機能を用いれば、作品情報のみを全文検索する検索機能をホームページに追加することもできる。

ASP サービスを利用する方法：

検索画面をカスタマイズしたい、同義語検索や検索キーワードに関連した情報を表示する「サジェスト」機能等を使いたい、Google のように無保証のサービスの利用が難しい等の場合には、ASP サービスを利用する方法もある。ウェブサイトの全文検索機能を提供する ASP(Application Service Provider) サービスは月額で 1 万円程度で利用可能であり、検索結果画面のヘッダやフッタ部分のカスタマイズ等に対応しているサービスが多い。作品情報の検索のために全文検索 ASP サービスを利用している事例は今回調査した範囲では見つからなかったが、ホームページ全体のサイト内検索として利用している美術館は存在する。

自前の全文検索サーバーを用意する方法

自前で全文検索サーバーを用意する場合には、Fess という全文検索ソフトウェアが簡単に利用できる。Fess は Java というソフトウェア環境で動作する全文

検索サーバーで Windows、Linux、Mac OS X 等の環境で動作する。HTML ファイルや PDF ファイルを検索対象することができ、携帯電話向けの画面などモバイル情報機器への対応もなされており、サーバーへの導入作業も（この種のソフトウェアとしては）非常に容易である等の特徴がある。

<http://fess.sourceforge.jp/ja/index.html>

2-2. データベースを用いた作品情報の発信

作品情報を構成する項目を意識しての検索を実現したい場合には、全文検索ではなくデータベースを用いた方法を採用する必要がある。

2-2-1. リレーショナルデータベースを使う

作品情報を発信するためのデータベースとして MySQL や PostgreSQL といった「リレーショナルデータベース（RDB）」が使われることが多い。

リレーショナルデータベースでは、作品情報を「表」に収めて記録する方式のデータベース。大量の情報をそれらの共通部分、重複等の関係を着目して複数の「表」に分けて記録し、必要に応じて「表」を組み合わせさせて検索等の処理を行う。

作品情報の作成

RDB に格納するための作品情報を作成するには EXCEL が便利である。逆に言えば、EXCEL 上で「キレイ」な表として作成できるような作品情報は RDB に適しているといえる。「キレイ」な表とは、1 作品 1 行としてデータを作成したとき、各列の使い方にばらつきがないような表である。

例えば平面作品のように作品情報の項目として

- ・題名
- ・作家
- ・制作年
- ・技法
- ・支持体
- ・形状
- ・縦
- ・横

というように作品ごとに項目の違いがなく、いずれの項目も作品題名等の文字列や大きさを表す数値が入るというように、どのようなデータが当該項目に入るのかということにもばらつきがない場合である。EXCEL から "Unicode テキスト" として作品情報を保存すれ

ば、そのファイルから RDB に作品情報を登録するための命令文（SQL 文）を容易に生成できる。

RDB の「限界」

EXCEL でキレイな表として作品情報が記述できないような作品が多い場合、例えば、

富本憲吉
白磁珈琲器
昭和 8 年
磁器・ポット・3
ポット：h21.5 D23.5；砂糖壺：h12.5 D11.5；ミルク入れ：h11.7 D12.5

松田権六
鶴蒔絵煙草入
昭和 30 年頃
漆・蒔絵・調度・5
煙草入れ：h6.3 w15.0 d10.0；灰皿：h2.0 D10.5；盆：h1.8 w30.3 d14.8

のようなデータが多く、うまく EXCEL のシートにできない作品が多い場合には RDB のデータベース設計に工夫を要する。作品情報から共通部分（＝作品題名や作家、制作年などの作品にも存在する項目）を 1 つの表にまとめ、共通でない部分については別の表に分離するなどして、個々の表が単純な表となるようにする等である。

ただし、作品はさまざまであるので、所蔵作品が増えていく将来まで想定することは難しいであろう。RDB では扱いにくく、いろいろな工夫をしなければ作品情報をうまく収められないような場合には、「ドキュメント指向データベース」のように他のデータ表現を採用しているデータベースを検討する余地があるといえる。

2-2-2. ドキュメント指向データベースの利用

2-1-1 で紹介した作品情報の構成に応じたクラス分けされた HTML ファイル：

```
<div class=' 作品情報 ' id='ABC012345'>
<div class=' 作品題名 '> 道路と土手と塀 ( 切通之写生 )</div>
<div class=' 作家 '> 岸田劉生 </div>
<div class=' 制作年 '> 大正 4 年 </div>
<div class=' 大きさ '>
  <span class=' 縦 '>56.0</span> × <span class=' 横 '>53.0</span></div>
</div>
```

は「文書」として見れば（クラス名と情報部分を取り出してみれば）、

ID: ABC012345
作品題名：道路と土手と塀 (切通之写生)
作家：岸田劉生
制作年：大正 4 年
大きさ：縦：56.0 × 横：53.0

となる。作品情報を構成する各項目は

（項目の）名前 + 値・内容

となっている。ドキュメント指向データベースにおける「ドキュメント」とは、情報を構成する項目ごとに

名前 (key) + 値・内容 (value)

という形式のデータの集まりとして情報を記述したものであり、一般的な自由記述の（＝構造を持たない）テキストとは異なり、「構造」を持ったテキストである。

文法的にはおおざっぱな表現であるが、ドキュメントの例を 2 つあげる。「名前」と「値・内容」は ":" で区切っている。

例 1)

作品題名：道路と土手と塀 (切通之写生)
作家：岸田劉生
制作年：大正 4 年
技法・支持体・形状・員数：油彩・キャンバス・額・1 面
大きさ：56.0×53.0
初出：2 回草土社展 (「切通しの写生」) (東京、玉木美術店 1916)
解説：1 9 1 3 年ごろから西欧の古典絵画や北方ルネサンス絵画への傾斜を見せてきた岸田劉生は、この作品によって再び「ぢかに自然の質量そのものにぶつかって」いく姿勢を表明した。1 1 月の陽が当たる関東ローム層の赤土の坂の隅々に、古典絵画の感化を経た眼をもって、改めて自然に肉薄しようとする作家の視線が注がれている。当時の作家の住まいに近く、《代々木附近 (代々木附近の赤土風景) 》 (1 9 1 5 年) にも描かれたこの坂は、現在マンションに囲まれてすっかりたたずまいを変えてしまった。第 2 回草土社展出品作。

例 2)

作品題名：鶴蒔絵煙草入
作家：松田権六
制作年：昭和 30 年頃
技法・支持体・形状・員数：漆・蒔絵・調度・5
大きさ：煙草入れ：h6.3 w15.0 d10.0；
灰皿：h2.0 D10.5；盆：h1.8 w30.3 d14.8



例 2 では、「大きさ」に工芸作品ならではの特徴がある。1 つの作品が「煙草入れ」、「灰皿」、「盆」で構成されているので、それぞれの大きさを記述する必要がある。また、「煙草入れ」、「灰皿」、「盆」それぞれ形状が異なるので「大きさ」を示すデータの組み合わせも異なっている。このような場合、RDB ではデータベース設計に工夫が必要となるが、ドキュメント指向データベースでは、このまま素直にデータを記述し、格納できる。すなわち

```
大きさ：
  煙草入れ：
    h: 6.3
    w: 15.0
    d: 10.0
  灰皿：
    h: 2.0
    D: 10.5
  盆：
    h: 1.8
    w: 30.3
    d: 14.8
```

というような項目構成のデータを格納できるのである。(本当は項目名として "h" や "d", "D" ではわかりにくいので、"高さ"、"奥行き"、"深さ" 等と表記した方がよい。)

このようなデータをドキュメント指向データベースでは

```
$r = find(" 作品題名 " => " 鶴蒔絵煙草入 ");
print $r[" 大きさ "][" 灰皿 "]["D"];
```

というように検索し、結果を利用することができる。(1 行目で、「作品題名」が「鶴蒔絵煙草入」である作品を検索し、その結果から項目「大きさ」の小項目「灰皿」のさらに小項目「D」の値を表示 (print) する、という意味である。実際のプログラミング言語を元に簡略化して記しているので、実際に動作する記述とは若干異なる。)

「ドキュメント」の記法
・基本形＝「名前」と「値」の組
ドキュメントの基本形は

{ 名前: 値 (内容) }

である。ドキュメントの始まりと終わりを明示するために {} で囲む。:(コロン) は名前と値を区切っている。{} の中にはコンマ「,」で区切って、複数の名前+値の組を並べて書くことができる。

・名前
二重引用符で囲まれた文字列である。日本語文字も使用できる。

・値
値は数値、文字列 (二重引用符で囲む)、真偽 (true, false)、空値 (null) の他に、名前+値の組や配列が使用できる。「配列」とは

```
["foo", "bar", "baz"]
```

のように複数のデータをひとつにまとめた ([""] の中にカンマで区切って並べた) ものである。

以上のルールで記述されたテキストファイルは "JSON(Javascript Object Notation)" 形式と呼ばれる、データ表記のための形式で、Javascript や PHP など多くのプログラミング言語で取り扱うことができる。

ドキュメントの例
例 1、例 2 を記法に則って記述すると以下ようになる。

例 1)

```
{ " 作品題名 ": " 道路と土手と塀 ( 切通之写生 ) ",
  " 作家 ": " 岸田劉生 ",
  " 制作年 ": " 大正 4 年 ",
  " 技法・支持体・形状・員数 ": " 油彩・キャンバス・額・1 面 ",
  " 大きさ ": " 56.0×53.0 ",
  " 初出 ": " 2 回草土社展 ( 「 切通しの写生 」 )
    ( 東京、玉木美術店 1916 ) ￥n
  " 解説 ": 1913 年ごろから西欧の古典絵画や北方ルネ
    サンス絵画への傾斜を見せてきた岸田劉生は、この
    作品によって再び「ぢかに自然の質量そのものに
    ぶつかって」いく姿勢を表明した。11 月の陽が
    当たる関東ローム層の赤土の坂の隅々に、古典
    絵画の感化を経た眼をもって、改めて自然に肉薄
    しようとする作家の視線が注がれている。当時の
    作家の住まいに近く、《代々木附近 ( 代々木附近
    の赤土風景 ) 》( 1915 年 ) にも描かれたこの坂
    は、現在マンションに囲まれてすっかりたたずま
    いを変えてしまった。第 2 回草土社展出品作。 }
```

例 2)

```
{ " 作品題名 ": " 鶴蒔絵煙草入 ",
  " 作家 ": " 松田権六 ",
  " 制作年 ": " 昭和 30 年頃 ",
  " 技法・支持体・形状・員数 ": " 漆、蒔絵・調度・5 ",
  " 大きさ ": { " 煙草入れ ": { "h": 6.3,
    "w": 15.0,
    "d": 10.0 },
    " 灰皿 ": { "h": 2.0,
    "D": 10.5 },
    " 盆 ": { "h": 1.8,
    "w": 30.3,
    "d": 14.8 } } }
```

例 2 は、元の作品情報の「構造」に素直に従って記述したが、あまりよい項目立てではない。というのも「大きさ」の小項目の名称が「煙草入れ」等では、作品の構成を知らなければ、後からアクセスできないからである。そこで前述の「配列」＝複数の値の並び、という表現を用いれば、

```
大きさ：
  名称：煙草入れ， 冫
  データ：          | =1 つ目
    h: 6.3,          |
    w: 15.0,          |
    d: 10.0          冫

  名称：灰皿，      冫
  データ：          | =2 つ目
    h: 2.0,          |
    D: 10.5          冫

  名称：盆，        冫
  データ：          | =3 つ目
    h: 1.8,          |
    w: 30.3,          |
    d: 14.8,          冫
```

と考えることができるので、例 2 を書き直すと

```
{ " 作品題名 ": " 鶴蒔絵煙草入 ",
  " 作家 ": " 松田権六 ",
  " 制作年 ": " 昭和 30 年頃 ",
  " 技法・支持体・形状・員数 ": " 漆、蒔絵・調度・5 ",
  " 大きさ ": [ { " 名称 ": " 煙草入れ ",
    " データ ": { "h": 6.3, "w": 15.0, "d": 10.0 },
    { " 名称 ": " 灰皿 ",
    " データ ": { "h": 2.0, "D": 10.5 } },
    { " 名称 ": " 盆 ",
    " データ ": { "h": 1.8, "w": 30.3, "d": 14.8 } } ] }
```

となる。

システムにとっては、情報の始まりや終わり、区切りは明確に指定する必要があるので、通常の文書に比べるとたくさんの括弧 ({} や []) が並んでいる点が煩わしいかもしれない。括弧の対応に慣れは必要だが、記述の自由度が高く、ヒトにもシステムにも可読な形式である。作品情報をドキュメント指向データベースを使って発信している事例はまだないが、国立新美術館の展覧会情報検索サービス (アートコモンズ、<http://ac.nact.jp>) では、展覧会情報の蓄積にドキュメント指向データベースのひとつ、MongoDB を使用している。展覧会により情報の項目立てにばらつきが生じた場合でも、システムの変更・拡張が容易に行える点が長所である。

<http://www.mongodb.org/>
<http://www.json.org/>

3. まとめ

インターネットへの作品情報発信がなかなか増えていかない状況の打開策として、柔軟性・自由度が高く、長い間使えて、さらに安価に利用できる技術が必要である。作品情報の発信は「月額 500 円程度のサーバーに PDF ファイルを置き、Google で検索」でも十分であり、また、RDB を使って作品情報の公開を考えるとき、作品情報に合わせたシステムの分析・設計に時間がかかり、その分コストと柔軟性を失うのならば、「ドキュメント指向データベース」のような「柔軟で、多少大雑把につかっても大丈夫な仕組み」を積極的に採用してもよいのではないだろうか。重要なのは、まずは発信すること、である。

宮崎 幹子（奈良国立博物館）

嘉数 周子（奈良国立博物館）

1. はじめに―博物館における文化財アーカイブズとは

「文化財アーカイブズ」というとき、私たちはどのようなものをイメージするだろうか。ここでは、一つの捉え方として、文化財の時間性・重層性について考えてみる。

- ・文化財は時とともに変化する（経年変化、修理、修復）
- ・文化財は様々な文脈において受容されうる（信仰、鑑賞、研究、保護の対象として）
- ・文化財についての記録や言説は、繰り返し生産され、積み重ねられる
- ・文化財の歴史的研究は、比較・対照・同定・年代観の形成（編年・集成）へと進む
- ・文化財への理解を深め、意義を見だし、保存・活用へと繋げていくためには、文化財をめぐる時間的・重層的特質を踏まえた、総体としての情報資源が必要となる

以上の要素を包含するものとして文化財アーカイブズを理解することはできないだろうか。デジタル技術をもちいた高精細画像の撮影や種々の計測データの取得は多くの活用の可能性があり、非常に有用なものである一方で、ある時点での文化財の「すがた」を切り取っているという意味では、時間性・重層性を再現することはできない。この意味においては、一枚の写真をもってアーカイブズと呼ぶことが出来ないのと同様に、単独ではアーカイブズそのものとはなり得ない。文化財の保存と活用を使命とする博物館の立場から、様々な形式・時代の情報資源の時間的・重層的な蓄積をアーカイブズの本質と考え、また、博物館における公共性・公開性を持続的に実現するための構成要素の一つとして、アーカイブズを考えたい。

2. 奈良国立博物館というところ

明治28年（1895）開館。仏教にかかわる歴史と美術を対象として、文化財の収集・保管・展示ならびに調査研究・教育普及活動をおこなっている。現在の収蔵品は国宝13件、重要文化財109件を含む約1,400件（4,500点以上）。これらに加えて、社寺や個人からの寄託品約2,000件を保管する。仏教美術を専門と

する博物館としては国内有数の質の高いコレクションを誇る。

奈良に国立博物館を設立した趣旨は、近代以降、困難な状況にあった社寺に伝わる多数の文化財を博物館で保管し、一般に公開してその価値を広く世間に知らせるとともに、それらの保存に協力することにあった。開館当初、収蔵品は殆ど無く、社寺からの寄託品より展示をおこなっていたが、時代が進むにつれて文化財は現地（所有者）で保管する方向へとむかい、寄託者への返還が相次ぐ。こうしたなかで収蔵品の拡充に努めるとともに、従来の名品展示からテーマに即した系統的な展示へと改革をはかり、仏教美術の専門的な研究機関としての意識も明確に打ち出すようになっていく。

この方針は今日まで続いているが、こうした流れと並行して永年に渡って調査研究を実施し、その成果として展覧会を開催し、同時に情報の収集にも取り組んできた。特に画像資料については貴重なコレクションを形成しており、現在はデジタル画像アーカイブズの構築にも力を入れている。

3. 奈良国立博物館における文化財アーカイブズ

文化財アーカイブズを形成していくための具体的な取り組みについて、奈良国立博物館での実践と基本的な考え方を4種類の情報資源に即して解説する。

収 蔵 品

- ・収蔵品データベース構築の歩み
内部では汎用的データベースを活用し、外部用データベースの開発と公開を優先させた。現在、引き続き内部用データベースの構築を進めている。
- ・業務システムか、情報公開システムか
日々作成・変更される管理的情報と遡及的情報の狭間で、両者を併存させるべく苦慮している。解説、画像、文献については遡及的情報の蓄積を実現。
- ・インターネットでの重層的な情報の公開
上記の情報を外部公開用データベースに反映。



図1 収蔵品データベース

画 像 資 料

- ・近現代における文化財調査と写真―ガラス乾板から高精細画像まで
- ・博物館の歴史を体現するアーカイブズとして
1980年代後半から、継続的に画像資料整理とデータベース構築、そして公開を実施。本年9月に画像データベースをリニューアル。
- ・画像資料蓄積の歩みとこれから
本格的なデジタル画像アーカイブズの構築に向けて、大容量ストレージを導入。画像資料の質・量の最適化とは。
- ・博物館の画像提供サービス（特別観覧）



図2-1 画像データベース 基本情報

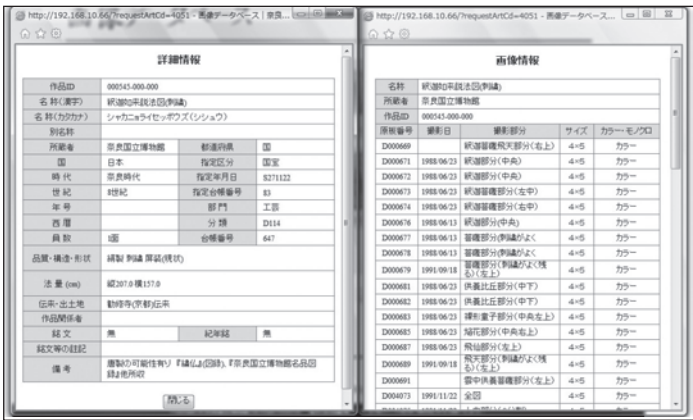


図2-2 画像データベース 詳細情報

文 献 資 料

- ・種類：図書、学術雑誌・紀要、展覧会カタログ、文化財報告書など
- ・文献資料の整理の実際
図書情報管理システムを導入し、OPACを公開。特に展覧会カタログなどの扱いについて、システムをカスタマイズ。OPACでは、展覧会カタログに掲載されている論文情報を公開。
- ・課題：書誌情報の更なる充実と共有に向けて
展覧会カタログや論文集に掲載の論文情報、出陳リストの蓄積に取り組む。今後の共有のあり方とは。

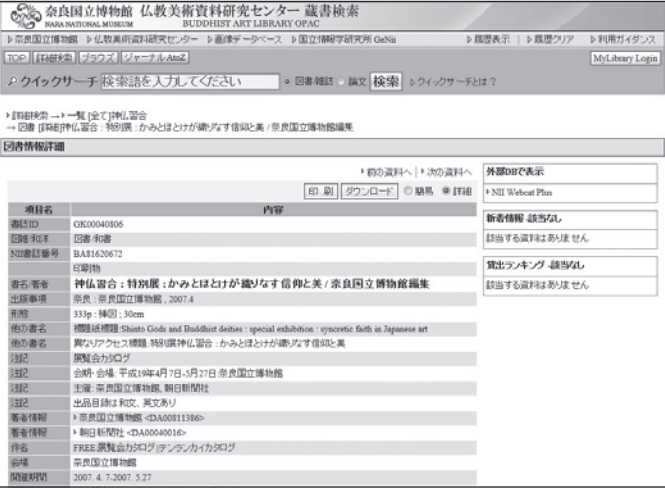


図3-1 OPAC 書誌情報



図3-2 OPAC 論文情報

アーカイブズ資料

博物館の内外で生産されたオリジナル資料（主に近代以降の文書類）をアーカイブズ資料と呼んでおく。

・種類：文化財修理記録、保存カルテ、館史史料など

・課題：整理方法の確立と他の情報資源との連携
アーカイブズ資料については、最近取り組みを開始したところで、アーカイブズ学の成果なども参考にしつつ、ミュージアムアーカイブズのあり方について検討している。

4. 情報資源の公開と連携—インターネットとミュージアムライブラリーをめぐって

今日、博物館において文化財アーカイブズの形成と利用者に対するアクセス経路の拡大を目指すにあたっては、デジタル化の推進とインターネットへの対応を抜きに考えることはできない。また館外の情報資源との連携（MLA 連携）や館内の情報資源の連携（所謂内なる MLA 連携）も大きな課題である。

これに加えて、文化財に関わる情報資源を公開する「場所」として、ミュージアムライブラリーという存在自体も引き続き有効性をもつものと考えている（セミナー2日目に仏教美術資料研究センターを見学）。ここでは、インターネットを介した内外の情報資源との連携の試みと、それとは対照的な、いわば古典的ともいえるライブラリーの意味について考えてみたい。

情報資源の連携

〈館外との連携〉

・文化庁文化遺産オンライン・国立国会図書館デジタルアーカイブポータル（PORTA）（→2012年 国立国会図書館サーチに統合）との連携

・検索エンジン最適化

・課題：メタデータフォーマットの導入、自動連携
現状では簡易なメタデータの提出によって連携を実現しているが、本格的な連携にむけて検討が必要。

〈館内での連携〉

・館内情報資源の連携
収蔵品データベース・画像データベース・OPACの連携を実現。

・課題：連携内容のさらなる充実、自動連携

仏教美術資料研究センター

〈資料の概要〉

センターの設置は昭和55年（1980）で、現在の建物で資料公開を開始したのは平成元年（1989）。センターの扱う資料は、博物館の活動範囲とする仏教にかかわる歴史と美術を中心とし、歴史・美術史・考古学研究に欠かすことの出来ない学術刊行物にとどまらず、画像資料やアーカイブズ資料など多種多様なものを含む。特に画像資料は大規模なコレクションを形成しており、画像資料の継続的な整理と活用はセンター開設の一つの契機でもあった。

図書 約67,000冊
雑誌・紀要類 約3,000タイトル
展覧会カタログ 約10,000冊
画像資料 37万カット以上
アーカイブズ資料（近代文化財修理報告書）
記録類 約370冊
ガラス乾板 約7,000枚 ほか

現在は週2日一般の利用者へ資料を公開しており、仏教美術を専門とするミュージアムライブラリーとして機能している。

公開日 毎週水曜日・金曜日
（祝日・休日、12月26日から翌年1月4日までは休館）
時間 9時30分から16時30分まで
サービス 閲覧・複写・レファレンス

〈建物について〉

センターは、建物の耐震補強改修工事のため平成21年（2009）10月より閉館していたが、平成23年（2011）3月に無事工事が完了し、8月に再開となった。この工事によって、耐震補強と同時に永年の懸案であった床組補強と集密書架の設置も実現し、また建物の部分的な復元もおこなわれた。文化財研究を支援し、情報資源の公開をおこなう「場所」として、機能そして象徴的な空間の両面において望ましい形に近づいたと考えている。

建物は明治35年（1902）に竣工、同年に奈良県物産陳列所として開館したもので、近代和風建築を代表する建物として高く評価されている。設計は、帝国大学工科大学造家学科（東大工学部建築学科の前身）出身の建築史学者、関野貞（1867—1935）である。

明治29年（1896）、関野は土木工事監督嘱託として奈良に赴任し、翌年奈良県技師に任命され、新たに制定された古社寺保存法のもとで県下古社寺の保存修理に奔走する。約4年間の技師在任中、古社寺の修理と調査と並行して建物の設計がなされた。関野は生涯にわたって膨大な調査記録を残しているが、この建物にはその成果が細部の建築様式として反映されており、建物自体が古建築研究と近代の文化財保護の歴史を内包する、すなわちアーカイブズ的性格をその身にまとっている、という極めて象徴的な存在なのである。

〈ミュージアムライブラリーという「場所」〉

今回の工事に際して、改めて「場所」の意味について考えてみる機会を得た。奈良という、めまぐるしく進展する都市からは遠く離れた地に存在するミュージアムライブラリーではある。しかし、豊かな歴史と多

数の文化遺産に恵まれ、また近代以降の文化財保護の歴史の中でも一つの重要な画期をなしたこの地において、文化財研究に対して情報資源を蓄積し公開していくという立場から果たすべき役割は少なくないだろう。

ミュージアムライブラリーの扱う資料は、展覧会カタログなど、大学・公共図書館では網羅的な収集が叶わないものが含まれる。また、文化財所有者の権利などとの関連から、デジタル化やインターネットでの公開が必ずしも最適とはならないケースがままあり、膨大な資料を目の前にして、その整理と公開の方法として目録作成以上の本文のデジタル化が優先的に指向されるとも限らない。そうした中で、利用者にアクセス経路として開かれたミュージアムライブラリーという「場所」は、引き続きその存在意義と共に魅力を持ち続けるのではないだろうか。

今後とも、インターネットを介した連携を推進すると同時に、ミュージアムライブラリー自体の充実についても力を注いでいきたいと考えている。



図4 仏教美術資料研究センター 外観



図5 仏教美術資料研究センター 閲覧室

全国美術館会議 情報・資料研究部会 企画セミナー III 予稿集
美術情報・資料の活用 ― 展覧会カタログから Web まで

発行 / 編集	全国美術館会議 情報・資料研究部会 (全国美術館会議 事務局) 〒110-0007 東京都台東区上野公園 7-7 国立西洋美術館内 TEL : 03-3828-0290 FAX : 03-3828-0295 URL : http://www.zenbi.jp
発行日	2011 年 12 月 16 日
印 刷	株式会社 プリンテック